

那珂 31

—那珂遺跡第77次・78次調査報告—

2002

福岡市教育委員会

「那珂 31」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 715 集 正誤表

誤

正

11 頁 11 行

長期間調査

長期間の調査

15 頁 Fig.11 の土層説明 第 2 周濠南壁(b - b')

第 2 周濠南壁(c - c')

「田島 A 遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 723 集 正誤表

誤

正

5 頁 7 行

SD05 北側

SD06 北側

6 頁 16 行

14 は

13 は

25 行

鉄片が

鉄片を

10 頁 27 行

浅壁の

浅く、壁の

11 頁 Fig.12 (スケール下段の数字) 5 cm

10 cm

14 頁 7 行

研磨上

研磨状

19 頁 Fig.23 スケール下段横に (109,110,111) が抜けている。

15 頁 Fig.18 ピットの番号が抜けている。下記のとおり。

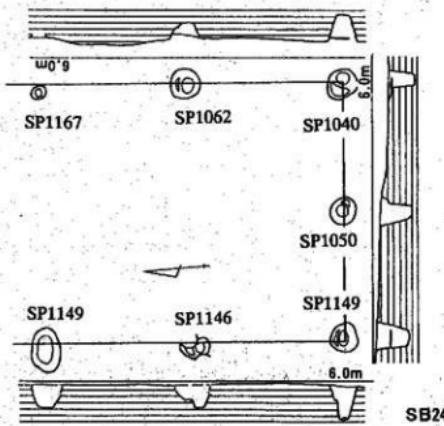


Fig.18 SB24 実測図(1 / 80)

NA KA
那珂 31

福岡市埋蔵文化財調査報告書第715集



77次 78次
調査番号 0045 0048
遺跡番号 NAK-77 NAK-78

2002

福岡市教育委員会

序

福岡市には豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現在に生きる我々の重要な務めです。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、平成12年度にアサヒビール株式会社博多工場敷地内で実施した那珂77,78次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、アサヒビール株式会社博多工場をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力を頂きましたことに対しまして厚くお礼申し上げます。

平成14年3月29日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

例　　言

1. 本書は博多区竹下3丁目1番1号のアサヒビル株式会社の博多工場整備拡充に伴う事前調査として、福岡市教育委員埋蔵文化財課が平成12年に発掘調査を実施した那珂遺跡第77・78次調査の報告書である。また、78次調査中に実施したアパート解体に伴う立会調査についても併せて報告する。
2. 本書に使用した方位は磁北で、座標北から6° 21' 西偏する。
3. 遺構、遺物実測、製図、写真撮影は調査担当者の他に、吉留秀敏（78次旧石器）、阿部泰之（78次遺物実測製図）、谷直子（77次遺物実測、製図）、牧野ミワ（77次製図）、秋山美希代、松末香織（78次製図）が行った。
4. 本書の作成にあたり上田保子、前田みゆき、中原尚美の協力を得た。
5. 本章の執筆、編集は各調査担当者および吉留秀敏（78次旧石器）が行った。
6. 本書に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。

調査番号	0045	事前審査番号	12-2-242	遺跡略号	NAK-77
調査地地籍	福岡市博多区竹下3丁目39番地外58筆			分布地図番号	37
開発面積	280m ²			調査面積	100m ²
調査期間	2000年10月4日～2000年10月6日			担当者	井上 薫子

調査番号	0048	事前審査番号	12-2-569	遺跡略号	NAK-78
調査地地籍	福岡市博多区竹下3丁目39番地外58筆			分布地図番号	37
開発面積	4,525m ²			調査面積	611m ²
調査期間	2000年11月15日～2000年12月25日			担当者	池田 祐司

本文目次

I.	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
II.	遺跡の立地とこれまでの調査	1
III.	77次調査の記録	5
1.	調査に至る経緯	5
2.	調査の概要	5
1)	調査経過	5
2)	調査地点の位置	5
3.	調査の記録	6
1)	遺構と遺物	6
(1)	溝	6
(2)	土坑	6
IV.	78次調査の記録	11
1.	調査に至る経緯	11
2.	調査の概要	11
3.	11地点の調査	11
1)	東光寺剣塚古墳	12
(1)	検出遺構	12
(2)	出土遺物	19
2)	その他の遺構と遺物	29
(1)	溝	29
(2)	近世墓	30
(3)	近現代の遺構	33
(4)	旧石器時代の遺物	33
4.	その他の地点の調査	34
5.	小結	36
V.	立会調査	38

挿図目次

Fig. 1	周辺の遺跡 (1/25000)	2
Fig. 2	周辺地形図明治23年 (1/10000)	3
Fig. 3	周辺の調査地点 (1/3000)	4
Fig. 4	77次調査地点の位置	5
Fig. 5	遺構配置図 (1/150)	7
Fig. 6	遺構実測図 (1/60,40)	8
Fig. 7	出土遺物実測図 (1/4)	9
Fig. 8	78次調査地点配置図 (1/500)	12
Fig. 9	11地点遺構配置図 (1/200)	13
Fig.10	第1周塚実測図 (1/100)	14
Fig.11	1区第2、3周塚実測図 (1/60)	15
Fig.12	2区第2周塚実測図 (1/60)	16
Fig.13	2区第3周塚、SD008 (1/60)	17
Fig.14	第1周塚出土遺物実測図1 (1/3、4)	18
Fig.15	第1周塚出土遺物実測図2 (1/3)	19
Fig.16	1区第2周塚出土遺物実測図1 (1/4)	20
Fig.17	1区第2周塚出土遺物実測図2 (1/3)	21
Fig.18	1区第2周塚出土遺物実測図3 (1/3)	22
Fig.19	1区第2周塚出土遺物実測図4 (1/4)	23
Fig.20	2区第2周塚出土遺物実測図1 (1/4)	24
Fig.21	2区第2周塚出土遺物実測図2 (1/4)	25
Fig.22	2区第2周塚出土遺物実測図3 (1/3)	26
Fig.23	2区第2周塚、1区第3周塚出土遺物実測図4 (1/3、4)	27
Fig.24	2区第3周塚 (SD003) 出土遺物実測図 (1/3、4)	28
Fig.25	2区第3周塚 (SD009)、SD008出土遺物実測図 (1/3、4)	29
Fig.26	SD007、011、012実測図 (1/60)	30
Fig.27	SD007、011、012出土遺物実測図 (1/4、3)	31
Fig.28	SK004、005、006実測図 (1/30)	32
Fig.29	SK004、005、006出土遺物実測図 (2/3)	32
Fig.30	IJ石器資料遺物実測図 (1/1)	33
Fig.31	第1から第10地点略図 (1/200、1/60)	34
Fig.32	第4地点実測図 (1/60)	35
Fig.33	第4、6地点出土遺物実測図 (1/4、3)	35
Fig.34	東光寺剣塚古墳全体図 (1/600)	37
Fig.35	東光寺剣塚古墳復元推定図 (1/1200)	38
Fig.36	立会調査地点 3区出土遺物 (1/3)	39
Fig.37	立会地点全体図 (1/500)	39

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

竹下3丁目に所在するアサヒビル株式会社博多工場敷地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡に含まれその西北端に位置する。敷地内には、特に弥生時代以降の遺構と遺物が常に分布し、前方後円墳である東光寺剣塚古墳、剣塚北古墳が存在することでも知られる。このため、工場の整備拡充にあたってはアサヒビル株式会社と福岡市教育委員会との間で事前協議を持ち、試掘調査、立会調査で遺跡の有無を確認している。敷地内は、過去の造成、施設建設等で遺構が破壊されている箇所もあるが、各地点で良好に遺存する遺構を確認し、現状保存できない場合について発掘調査を行い、多大な成果を得てきた。その調査も10次を数える。また、東光寺剣塚古墳については、アサヒビル工場により整備、公開が行われ、文化財保存、普及のための努力が成されている。

平成12年度はパレット置き場の増設、貯蔵場建設、社宅解体の計画がなされた。これらの工事は諸処の事情で事前の試掘調査が難しく、立会、試掘調査を行い、遺構・遺物を確認した時点で本調査にかかると言う順序で事業が始まった。その結果、パレット置き場、貯蔵場では遺構への影響が避けられない部分について本調査を、社宅部分について立会調査を行った。

調査にあたっては、アサヒビル株式会社博多工場をはじめとして、株式会社アサヒビルエンジニアリング、鏡高組の皆様より、発掘作業についてご理解を得ると共に多大なご協力を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

2. 調査の組織

事業主体 アサヒビル株式会社博多工場

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財課 課長 山崎純男

調査第1係長 山口譲治 第2係長 力武卓治

調査庶務 文化財整備課 宮川英彦 御手洗清

事前審査 大庭康時 加藤隆也

調査担当 調査第2係 井上蘭子（第77次調査、立会） 調査第1係 池田祐司（第78次調査、立会）

発掘作業 有田恵子 石川洋子 泉本タミ子 伊藤美伸 乾俊夫 大賀規矩雄 金子二三枝

唐島栄子 木村文子 桑原美津子 幸田信乃 指原始子 柴田博 國部保壽 高著一夫

志堂寺堂 田端名穂子 田中トミ子 塚本よし子 中村幸子 永松トミ子 鍋山治子

花田則子 濱地静子 林厚子 揖磨智恵子 平井武夫 吹春憲治 福場真由美 藤原直子

北条こず江 森本良樹 水野由美子 安田光代 安元尚子

II. 遺跡の立地とこれまでの調査

那珂遺跡は福岡平野の中央部に位置し、那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に位置する。この丘陵は花崗岩風化礫層を基盤として、Aso 4起源の噴出物である八女粘土、鳥栖ローム層などを最上部とするもので、春日市須玖岡本丘陵の先端付近から福岡市博多区博多駅南付近の比恵遺跡までの範囲に島状に分布している。鳥栖ロームの上部には新規ロームおよびクロボク質土が堆積するが、丘陵の



Fig. 1 周辺の遺跡 (1/25000)

ほとんどで後世の開発のため失われている。遺跡の範囲は南北約1.6km、東西0.8kmと推定され、現在の標高7.5~11mを測る。この丘陵および前面の砂丘上には各時代にわたる濃密な遺構の分布が確認されている。那珂遺跡群については既刊の各報告書に詳しいので参照されたい。

今回の朝日ビール博多工場は那珂遺跡群の北西端に位置し、これまでに10次におよぶ調査 (Fig. 3) が行われ、弥生時代前期から古代を中心とした遺構遺物が多数検出されている。その調査結果については以下のように報告書が刊行されている。

15次調査 「東光寺剣塚古墳」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第267集 1991

10~12、14、16、17、21次調査 「那珂5」 同291集 1992

50次調査 「那珂18」 同518集 1997

64次調査 「那珂24」 同638集 2000

調査の詳細については各報告書を参照されたい。また「那珂24」において、それまでの調査の概要をまとめている。ここでは、77、78次調査に関連する遺構と地形について簡単に触れておきたい。

77次、78次調査区付近では、那珂遺跡は東西幅約1.7kmを測り、その中央部西側に位置する。その西端については64、10、14次調査地点の西側で丘陵の落ちが確認されている。東光寺剣塚古墳の南東

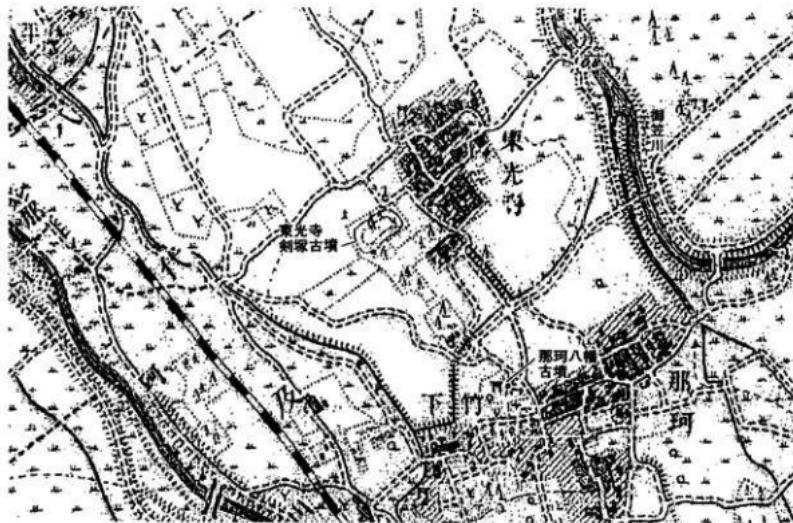


Fig. 2 周辺地形図明治33年 (1/10000)

350mには那珂八幡古墳が存在し、その間には東側から浅く狭い谷が入る。また、工場敷地の東に隣接する道路に沿って、浅く狭い谷があり、東側の丘陵の高まりと、工場敷地がある西側の高まりとを分けている。西側の高まりはFig. 3で見られるように12次調査地点の南側に標高10mの等高線示す部分がもっと高く、東西に傾斜している。特に西側は段を成して落ちるものと考えられる。この最高部付近には明治33年の地図 (Fig. 2) では針葉樹林の表示があり尾根状の高まりになっていたのではないかと考えられる。この最高部に近い12地点の遺構検出面は、標高7.5mであり2.5m以上が削平されていると推定される。現状でも工場敷地内と南側の敷地外では段差が見られる。また、15次調査の東光寺剣塚古墳後円部の第15トレンチでは、古墳盛土下の旧表土が標高9.4mを測り、北側に向かって丘陵の標高が落ちていたことが窺える。それと同時に削平の大きさを知ることもできる。第77次地点は最高部よりやや東によるが、遺構検出面が8.0mで2 m以上の削平が、78次地点の周濠検出地点では遺構検出面が標高7.5mであることから1.5mの削平が成されていることが推定できる。ただし、工場敷地内の丘陵も単純なものではなく、10・15次調査の間に幅25から30mの深い解析谷が推定されている (『東光寺剣塚古墳』図2、「那珂5」275頁)。これは10次調査と15次調査の間の試掘調査で湿地状の堆積が見られたことによるが、Fig. 2 の地図でもこの部分のみ水田が存在しており、その痕跡とも考えられる。78次調査の1地点でも湿地状の堆積を確認し、丘陵に解析した谷もしくは人工的河道等が想定される。今後、試掘調査の際にも範囲、性格について注目する必要がある。

78次調査で周濠の一部を確認した東光寺剣塚古墳は、墳長75mを測る前方後円墳である。古くから知られていた古墳であったが、1988年に重要遺跡確認調査として行われた15次調査が本格的な調査としては唯一のものである。トレンチ調査の結果、周濠は3重にめぐり、第3周濠南東側に造り出し部が復原されている。主体部は後円部にあり、南側のくびれ部に開口する全長約9mの複室の横穴式石室である。後室奥壁沿いには阿蘇凝結凝灰岩切石の石屋形が設置されている。現在石室内には石仏数

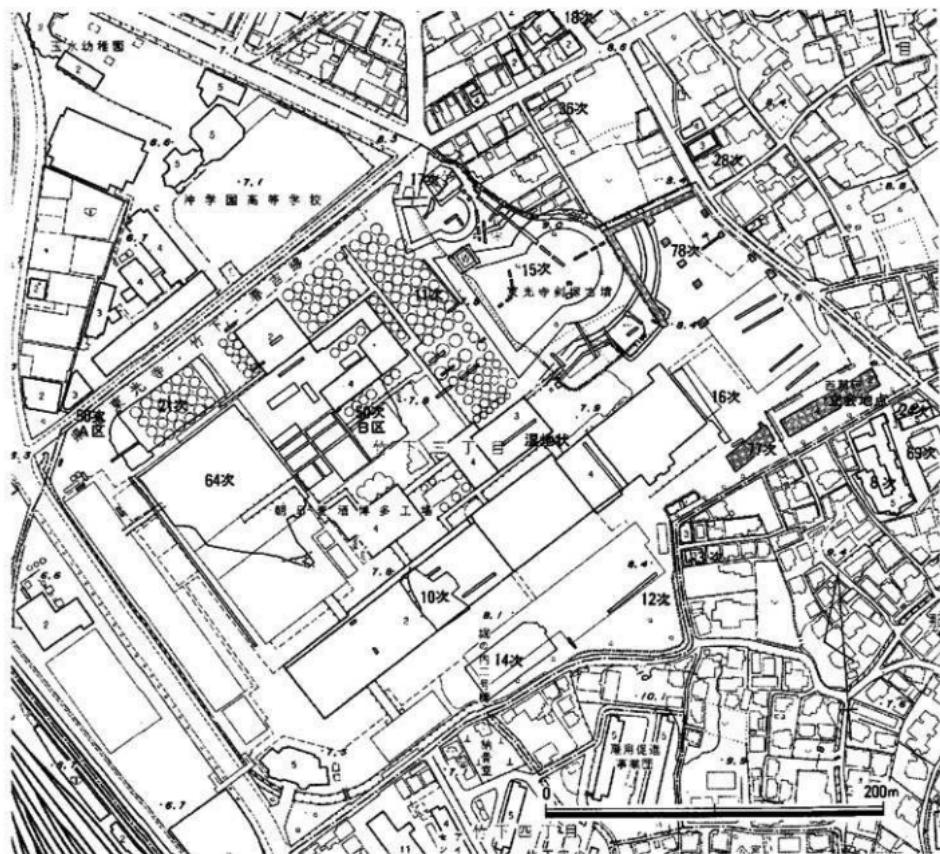


Fig. 3 周辺の調査地点 (1/3000)

基と木造の門が設けられ、信仰の対象となっている。周濠からは円筒埴輪をはじめとする遺物が出土している。円筒埴輪は無黒斑で外面を一次調整縦ハケだけで終え、円形透孔、低い突帯を有し、最下段突帯に断続ナデ技法を用いるものがある。石室、遺物等から6世紀中葉の年代が想定されている。

東光寺剣塚古墳の北西側には、17次調査で埴輪が出土する溝を検出し、前方後円墳の存在を確認している。限られた調査からではあるが、後円部直径24m、墳丘全長30m以上が復原され、剣塚北古墳と呼称されている。出土した埴輪が縦ハケ一次調整のみの個体が過半数を占め、二次調整として断続横ハケを含み、人物埴輪の存在から5世紀後半から6世紀初頭の時期が想定されている。

III. 77次調査の記録

1. 調査に至る経緯

2000年6月29日に、アサヒビル株式会社博多工場より、乾燥パレット置場の改築工事に先立ち、工場敷地内における埋蔵文化財の有無について事前審査申請が提出された。申請地は那珂遺跡群の中心部であり、これまで同敷地内において数次にわたる発掘調査が行われてきたが、隣接地における調査成果及び、改築工事における掘削がほとんどないという前提から、慎重工事及び立会による工事進行となった。ところが、工事段階で掘削深度が予想以上に深くなり、地山である鳥栖ローム上面に遺構が確認されたため、直ちに工事を中断し、発掘調査を行うことになった。調査は2000年10月4日に着手し、10月6日に終了した。

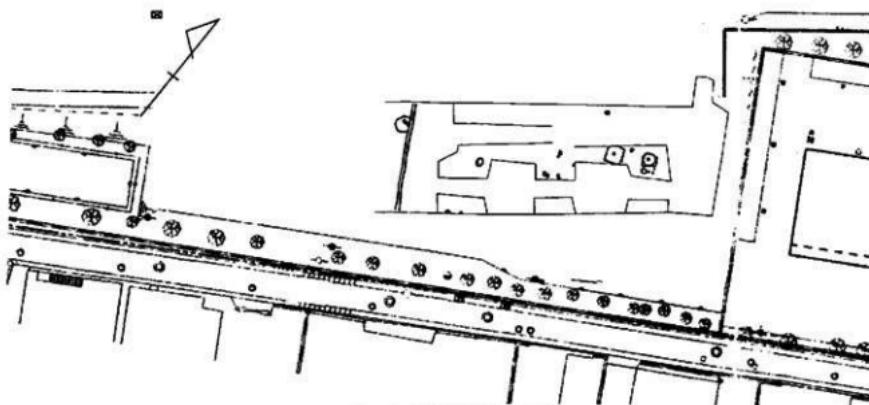
2. 調査の概要

1) 調査経過

2000年10月3日、乾燥パレット置場改築工事のための車機による既存建物の解体が行われていたが、掘削面が現地表面より約50cmの深さとなり、鳥栖ローム面が露出した。上面に遺構が確認されたため、すぐに工事を中断し、翌4日、発掘調査に着手した。遺構面は既存建物の基礎による搅乱が激しいこと、さらにそれ以前の整地により削平を受けていることから、検出された遺構は少なかった。また、土置場が確保できないため、遺構が検出されなかった場所に残土をおきながらの調査作業となった。遺構の掘削、実測、写真撮影を行い、10月6日には撤収、調査を終了した。

2) 調査地点の位置

調査地点は工場敷地の南東コーナー付近に位置する。すぐ北西側には第16次調査地点、さらにその北西には東光寺剣塚古墳、東側には第8次、第24次調査地点が立地する。第16次調査地点では、溝、第8次調査地点では、弥生時代中期の竪穴住居址、掘立柱建物、青銅器鋳造関係の遺物、古墳時代後期竪穴住居址、7世紀後半～奈良時代の溝・大井戸、中世の大溝が検出されている。第24次調査地点では、弥生時代中期後半の井戸、中世末期の溝が検出されている。



3. 調査の記録

1) 遺構と遺物

遺構面は大きく削平されており、遺構のほとんどは失われていた。それでも溝1条、貯蔵穴と思われる土坑2基、土坑、ピットが検出された。以下、各遺構と出土遺物について述べる。

(1) 溝

SD02 (Fig. 6)

調査区の南西端で検出された。北西—南東の方位をとる。幅30~50cm、深さ15~65cm、延長10.6mを測る。ほぼ直線的に掘り込まれており、土層堆積状況を見ても水が流れた形跡はない。また一度埋没したあと掘り直されたと思われる。出土遺物は少ない。

出土遺物 (Fig. 7 1・2)

1は甕の底部である。底径11.8cmを測り、胎土は緻密で暗褐色を呈する。半底を呈する。弥生時代中期頃か。2は山陰系の瓶形土器の底部と思われる。器壁は厚く、底部はほぼ直線的に立ち上がり、胴部へく字状に屈曲して開く。底部のやや上部には断面三角形の突帯が一条めぐる。径2mm以下の砂粒を含むが胎土は緻密で、赤褐色を呈する。底径は17.8cmを測る。この瓶形土器は弥生時代後期から古墳時代前期にかけて山陰地方を中心に分布する。福岡市内では、那珂遺跡、雀居遺跡から出土している。那珂遺跡出土のものは、底部から口縁部へ向かいゆるやかに聞くものの、ほぼ筒状を呈する。底部より環状把手が横方向に付き、底部付近には断面三角形の突帯が一条めぐる。底径は12cmを測る。雀居遺跡出土のものは、底部がややすばり気味の筒状を呈し、胴部上半に縱方向の環状把手、底部近くに横方向の環状把手がつく。その下に断面三角形の突帯が一条めぐる。本調査地点出土のものは、底部が屈曲する点で、いずれの例とも異なるが、鳥取県米子市青木遺跡出土の例で底部付近が類似したものがあり、瓶形土器と推定される（久住猛雄氏のご教示による）。

この他に庄内式土器の破片も出土しており、瓶形土器と合わせて、SD02は弥生時代終末と推定される。

(2) 土坑

SK01 (Fig. 6)

SD02の北西側で一部切られる。上部は削平を受けており、底面付近のみの残存である。ピット状の落ち込みが見られる。平面はほぼ円形を呈し、径は1.56m、深さは0.14mを測る。上部が削平されているため、明確ではないが、底面の大きさや形状から、貯蔵穴と推定される。出土遺物は少ない。

出土遺物 (Fig. 7 3)

大型甕の胴部になると思われる。断面三角形の突帯が二条めぐる。胎土は緻密で暗赤褐色を呈する。弥生時代中期の時期であろう。

SK03 (Fig. 6)

調査区のほぼ中央で検出された。平面は梢円形を呈し、長径0.84m、短径0.64m、深さ0.47mを測る。出土遺物は少ない。

出土遺物 (Fig. 7 4)

4は壺の口縁部である。大きく外反する。胎土は緻密で赤色顔料が付着する。弥生時代中期後半か。

SK04 (Fig. 6)

調査区中央からやや北東よりに位置する。平面形は方形を呈し、長軸は1.9m、短軸は1.7m、深さ0.18mを測る。遺物は少量で図化に耐えない。貯蔵穴の可能性もある。

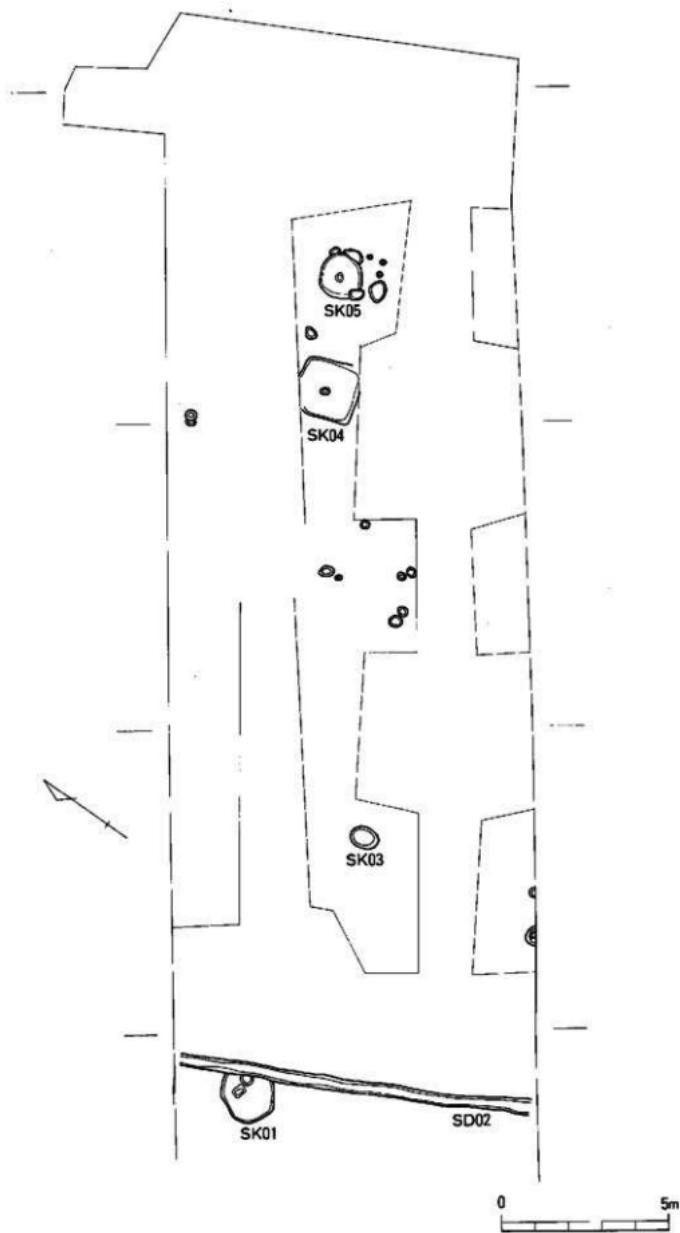


Fig. 5 遊撃配置図 (1/150)

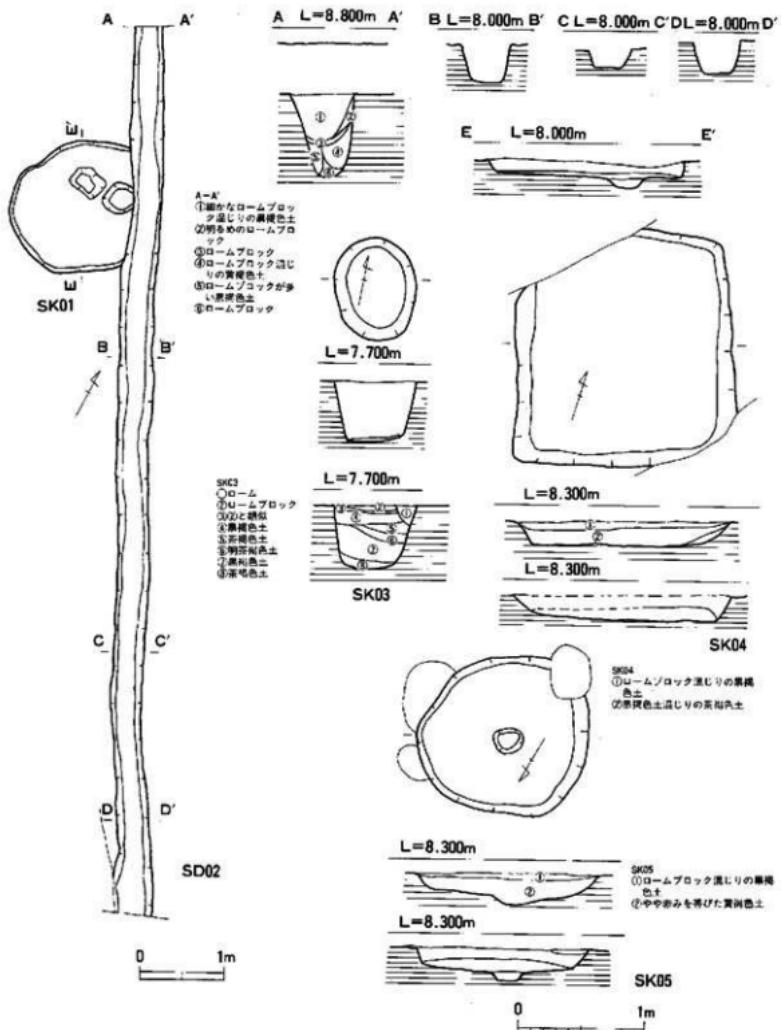


Fig. 6 過構実測図 (1/60,40)

SK05 (Fig. 6)

調査区北東より、SK04の北東側に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、長径は1.35m、短径は1.24mを測る。ほぼ中央にピット状の落ち込みがあり、形状はSK01に類似する。上部に黒褐色土が堆積しており、SK01と同じく貯蔵穴であると思われる。出土遺物はほとんどなかった。

2. 小 結

前述のとおり、今回は工事を中断しての調査となつたこと、また、既存建物の解体や以前の整地等による遺構面の削平のため、遺構は大部分が失われていたことなどから充分な成果を挙げることはできなかつた。しかしながら、検出された遺物や遺構からこの付近は弥生時代前期～終末にかけて集落が広がつていたと考えられる。

SD02から出土した土器は、山陰系の甑形土器と考えられるが、この上器は、集落や住居址でのみ出土し、集落内祭祀などにおける共同炊飯の場で使用されたという指摘がある（註）。那珂遺跡や雀居遺跡の例はいずれも住居址内の出土であり、本調査地点の例は溝からの出土である。近辺でなんらかの祭祀が行つれていた可能性がある。またこの溝は、第16次調査地点検出の溝の延長であろう。

その他、上坑のうち、SK01、SK04、SK05は貯蔵穴の可能性が高く、貯蔵穴が分布していたと考えられる。アサヒビール工場敷地内の調査において、第21次、第50次、第64次調査地点で弥生時代前期後半～中期初頭頃の貯蔵穴が検出されており、敷地の西コーナー付近に貯蔵穴の分布が見られる。本調査地点の土坑が貯蔵穴とすると、東コーナー付近にも貯蔵穴の分布があると考えられる。

今後の調査成果に期待したい。

(註)

杉井健「山陰型甑形土器と山陰地方」『古文化談叢』33 1994

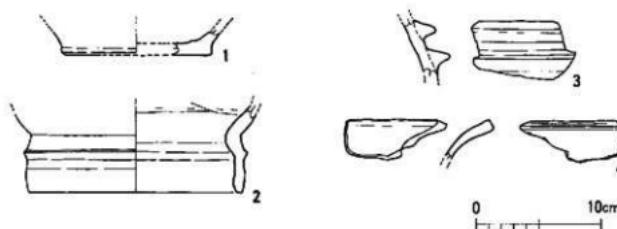
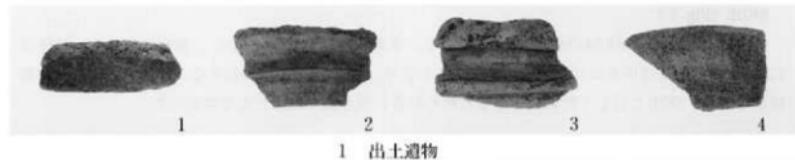


Fig. 7 出土遺物実測図 (1/4)



1 出土遺物



2 調査区南西側（南東から）



3 調査区北東側（南東から）



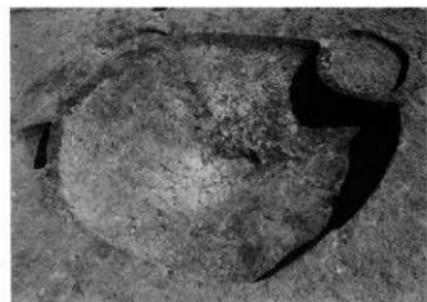
4 SK01、SD02（北から）



5 SK03（南から）



6 SK04（南から）



7 SK05（北から）

IV. 第78次調査の記録

1. 調査に至る経緯

平成12年10月11日付けでアサヒビール株式会社博多工場 执行役員工場長尾関正彦氏より福岡市教育委員会宛に、博多区竹下3丁目1-1アサヒビール株式会社工場内の4,525m²に関する埋蔵文化財事前審査願が提出された。(事前審査番号12-2-569)申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群内にあたり、アサヒビール株式会社博多工場内でも10次にわたる発掘調査が行われている。また、申請地の西側には東光寺剣塚古墳が隣接し、申請地内にその周濠が巡ることが予測された。このため埋蔵文化財課は、申請者に遺構が存在する旨を回答し、その取り扱いについて協議を行った。申請地の貯蔵場には覆い屋建設が計画され、その基礎工事は遺構面に影響を及ぼすことが避けられない規模であった。また、事業地は貯蔵場としての使用を中止することができず、特にその中央部分は長期間調査を行うことができなかった。このような条件を受け、基礎で影響を受ける部分について試掘調査を行い、遺構を確認した場合は引き続き発掘調査を行うという手順で調査を進めることになった。その際、事業地の縁辺部で古墳の周濠の存在が予測される部分については4m幅の延長で調査区を設定し、他の部分は実際に基礎工事で壊される4m四方を調査区として設定することで合意した。以上の協議を受けて委託契約を締結し、平成12年度に発掘調査、平成13年度に資料整理・報告書作成を行い記録保存を図ることとした。発掘調査は平成12年11月15日から同年12月25日までの期間行った。調査面積は611m²で遺物はコンテナ箱15が出土している。

2. 調査の概要

今回の事業地は東光寺剣塚古墳の東側に位置する。大正9年にビール工場の前身がつくられ、その後社宅が並び、60年代以前は空き地であったという。現在はほぼ平坦に整地、アスファルト舗装がなされ、貯蔵場として使用されている。

調査は基礎部分11地点について行った。(Fig.8) このうち1~10地点については、現在の貯蔵場としての機能を維持する必要から、一地点が終了すると現状復旧しながら進めた。その結果、事業地中央の2~4地点では搅乱土直下で鳥栖ロームとなり、4地点で中世の溝等を確認した他は遺構遺物を確認できなかった。かなり削平されていると考えられる。1地点では湿地状の堆積を確認した。東側の6から10地点では、削平は小さいものの明確な遺構は確認できていない。対象地西側と北側の11地点は、古墳の周濠の存在が予測されたため4m幅の延長で調査を行い、3重に巡る周濠を確認した。そして1989年の調査で推定されていた3重目の周濠の造り出し部の規模が拡大することを確認した。この他には、中世の溝および近世墓を検出した。5地点でも第3周濠を確認し、11地点と一緒に調査を行った。記述にあたっては、11地点の北側の東西方向部分を1区、西側の南北方向部分を2区と呼称する。以下、遺構が集中した11地点、その他の地点の順で報告する。

3. 第11地点の調査

1区は対象地北端の東西方向に設定した幅4m、長さ55mの調査区で東光寺剣塚古墳墳丘の主軸に近い。検出した遺構は、東光寺剣塚古墳の第1、2、3周濠、中世の溝である。遺構前面はアスファルト、搅乱土を5、60cmほど取り除いた鳥栖ロームの上面で、かなりの削平が行われている。また、戦前の地図に記載されている建物のものと考えられる煉瓦作りの水路の基礎、建物解体時のゴミ穴等を

確認した。近現代の遺構は調査の対象とせず掘削を行っていないが、遺構検出の際に確認できた遺構のプラン、煉瓦造りの溝等は記録した。ただし、今回の報告にあたっては、煩雑を避けるため表示していない。

1) 東光寺剣塚古墳

(1) 検出遺構

第1周濠 (Fig.10)

東光寺剣塚古墳口縁部に隣接する1区西端から2区北側にかけて、延長20m深さ1.7mの段落ちを検出した。その位置関係から古墳の第1周濠に相当することは確実である。しかし、15次調査での知見

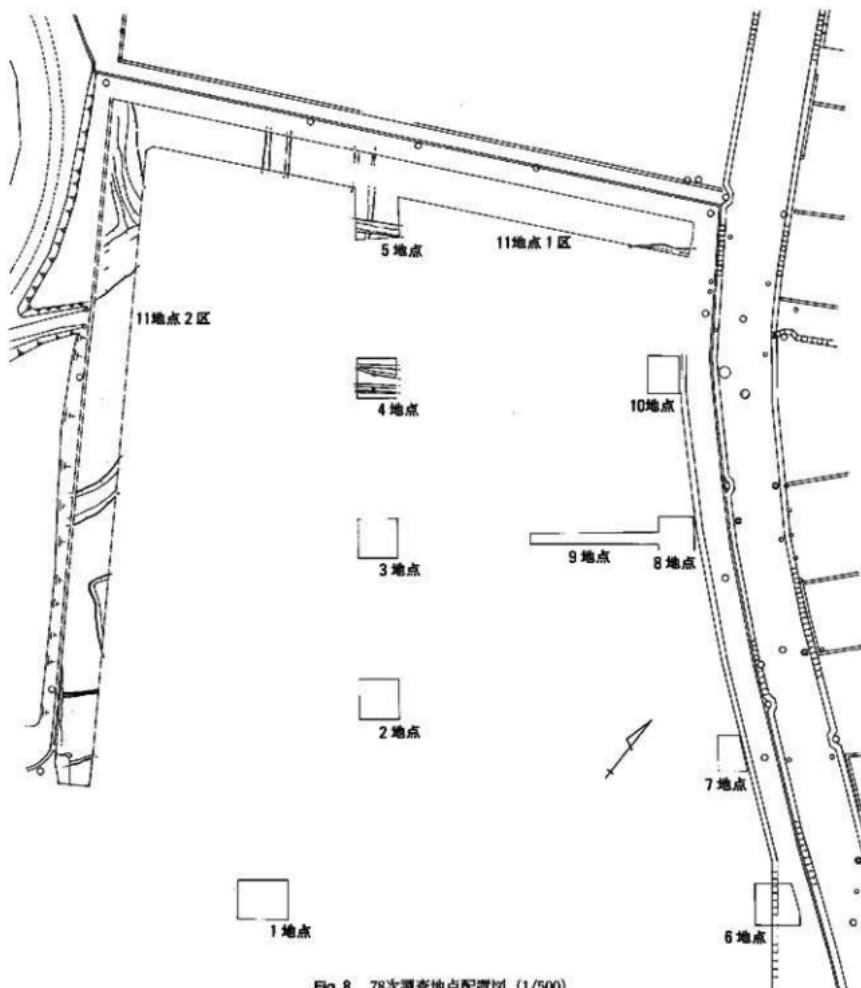
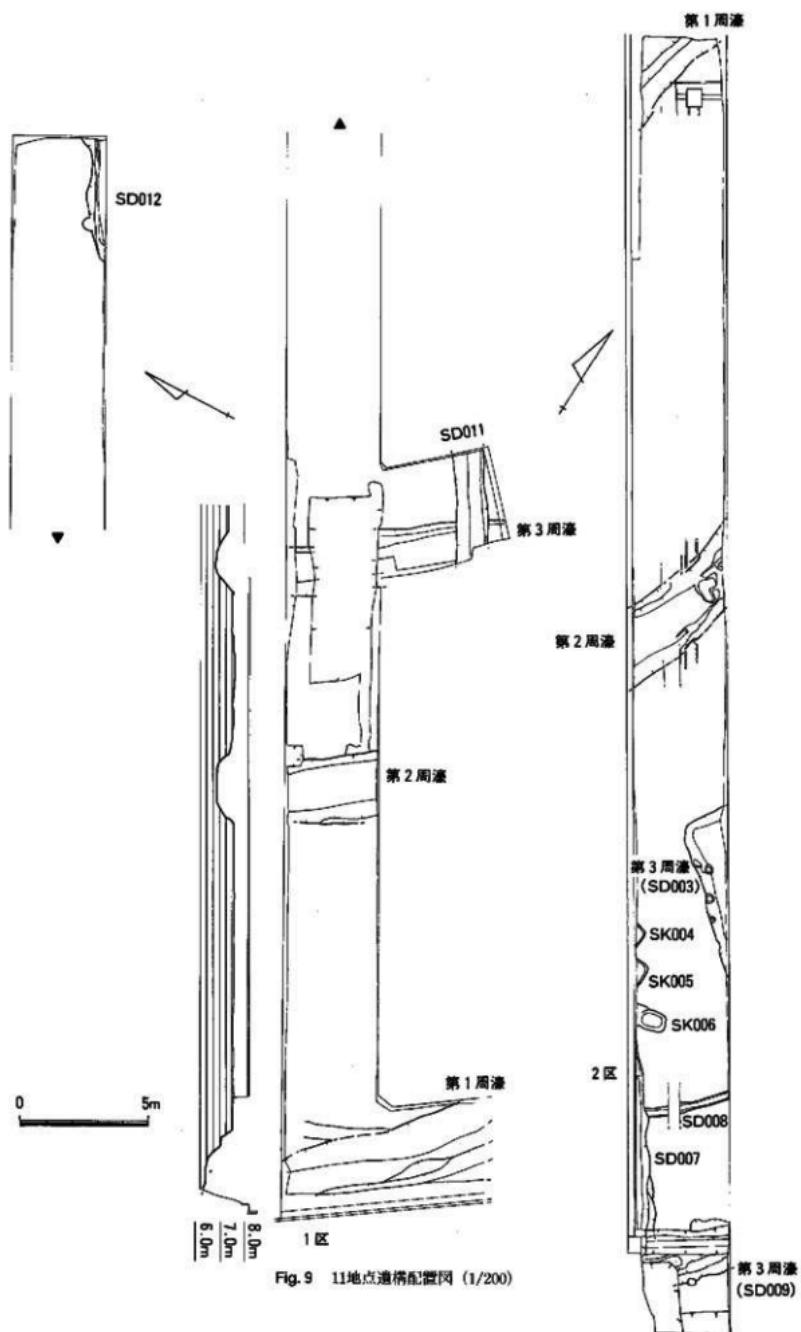


Fig. 8 78次調査地点配置図 (1/500)



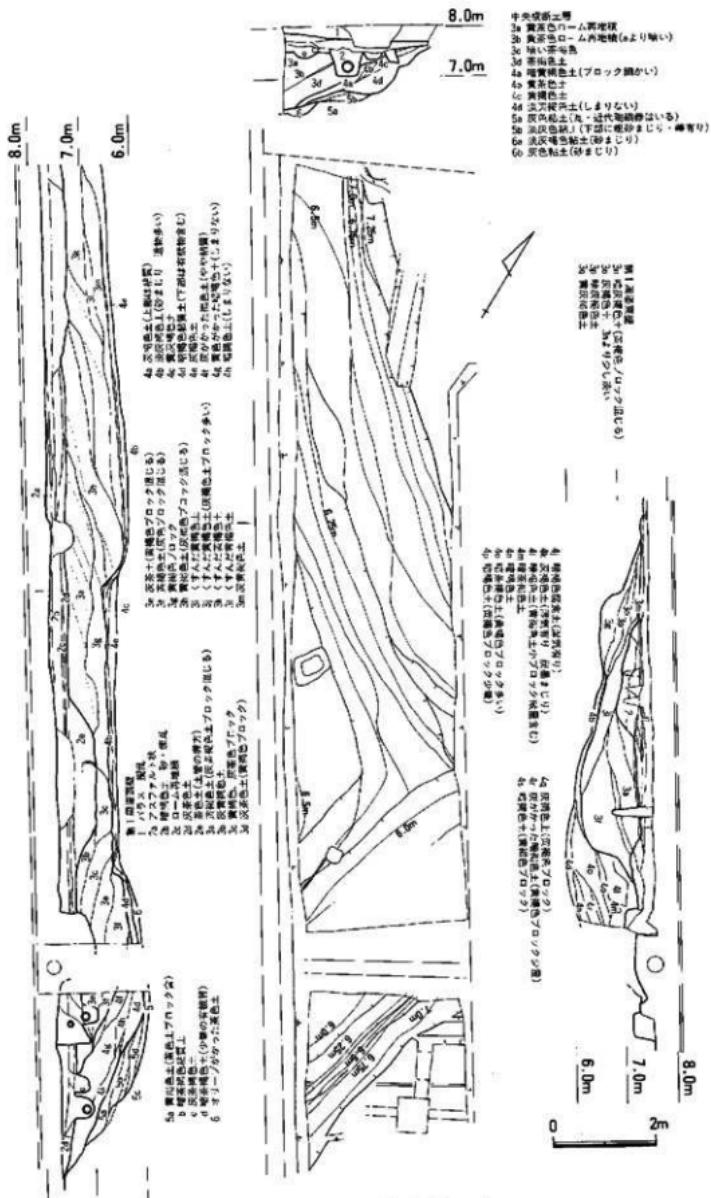


Fig.10 第1周塗実測図 (1/100)

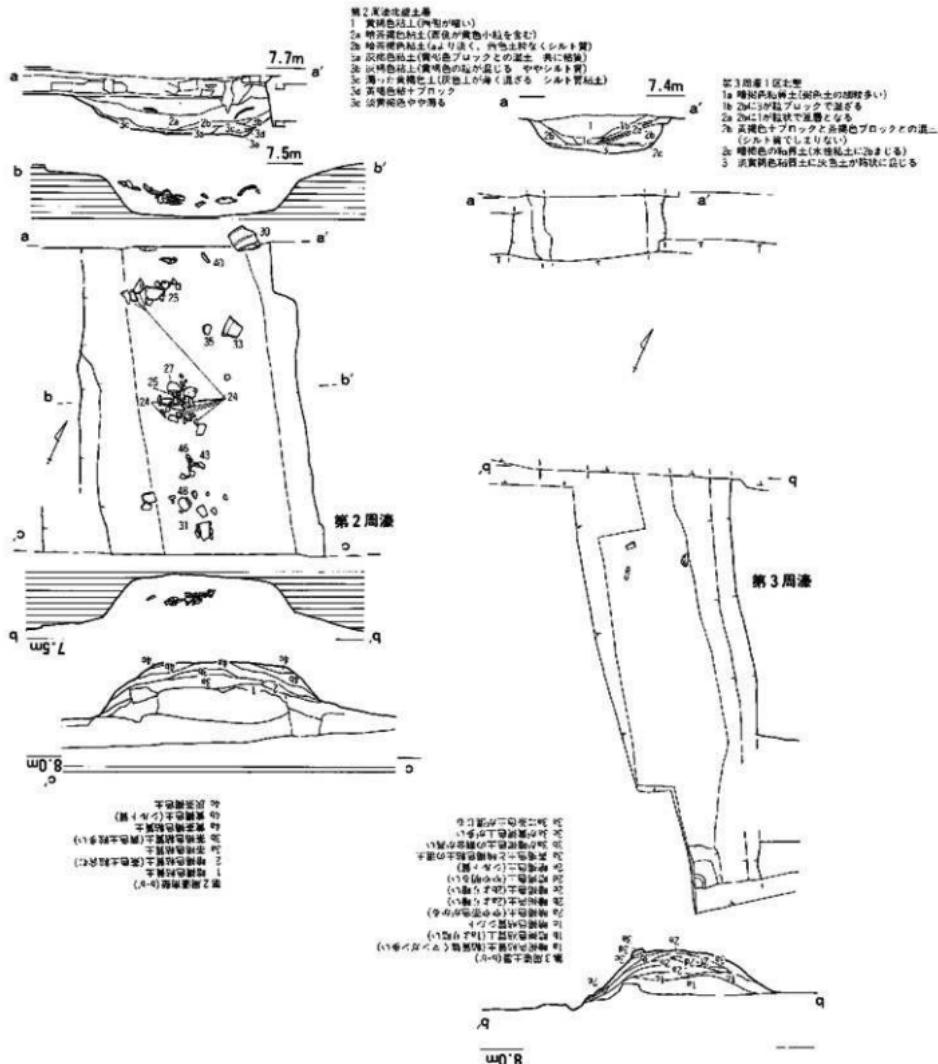


Fig.11 IX第2., 3周深実測図 (1/60)

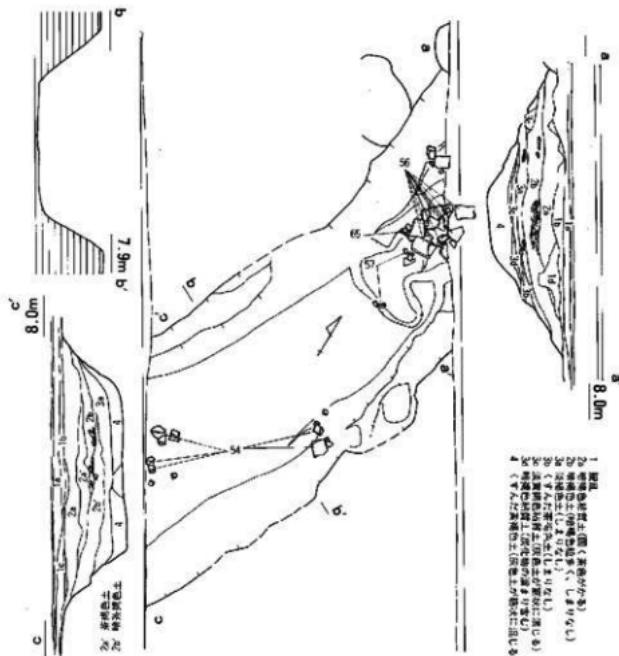


Fig.12 2区第2周濠実測図 (1/60)

と同様に最下部で近世までの遺物が出土した。平面プランも上端が直線的で、床には溝状の掘り込みがあり、かなりの改変を受けている。当初のプランはやや内側を巡ると考えられる。今回検出したプランと15次調査の15トレンチからの推定で床面幅約6m、上面幅約14mを測る。また埋土の大部分を占める3層は鳥栖ロームの客土で、深さ0.8m以上が一度に埋められている。工場敷設時のものではないだろうか。客土前は前方部前面と墳丘南側にあったとされる「池」が東側にもあったと考えられる。Fig.2の地図にはいずれの「池」も表示されていない。「筑前名所図絵」那珂郡劍塚の項には「めぐりに掘りあり」とあり、第1周濠が当時埋没していないことを示すと考えられる。検出した南側部分と底のわずかに褐色系の粘質土が堆積し、若干の埴輪、須恵器を含む、近世、近代を主体とする遺物が出土した。

第2周濠 (Fig.11, 12)

1区では第1周濠から東に12mの位置に南北方向に走る幅2.7m、深さ0.6mを検出した。床面の標高は6.9mである。断面は逆台形を呈し、埋土は3層がクロボク質の茶褐色粘質土、最下層4層は3層より淡い茶褐色土である。埴輪を主体とした遺物は、床面より15から30cm上位の3層で集中して出土し、4層はごくわずかである。

2区では第1周濠から16mの位置を内湾しながら調査区を斜行する。現存幅3.2m、深さ70~90cmを測り、床面の標高6.8~7.1mである。調査区中央部を現代の煉瓦造り水路で搅乱を受けている。確認した範囲の西壁、中央、東壁部分に埴輪が集中して出土し、特に東壁側に多い。いずれも床面から30から60cm上位で出土している。埋土は4層の粘質でしまりの強い黄褐色土、3層の淡黄褐色の水性堆

積の後に2層暗褐色のクロボク質土が溜まる。2層から埴輪を主体とする遺物が出土し、3、4層からは出土していない。

第3周產 (Fig.11, 13)

1区では第1周濠から21.5m、第2周濠から6.4mの位置に南北方向に走る。5地点部分は西側の上端が調査区外となり確認できていない。また調査区南側部分をSD011cに切られ、南端には深さ35cmのピット状の掘り込みがある。1区部分は擾乱で大きく破壊されている。土壠断面で現存幅2.4m、深さ0.65mを測り、床の標高は6.9mである。埋土はクロボク質の暗褐色土の1、2層、2層に黄褐色土が混じる3層で、床面の標高は6.8mである。遺物は床直上で弥生土器片3、須恵器片1と埴輪のタガ片1点が出土したのみである。

2区ではSD003、009とした溝が第3周漆に相当すると考えられる。

SD003はほぼ直に屈曲する遺構のコーナー部分である。第2周濠から5.9mを測り、1区の第2、3周濠間の位置関係に近い。深さ0.75mが残存し、床の標高6.8mを測る。埋土の大部分は2層暗茶褐色土で、最下層に4層黄茶褐色粘質土が溜まる。床より50から60cm上位の2層上部で埴輪が1カ所に集まった状態で出土した。これらの特徴から周濠の一部と考えられ、後述するように第2周濠の同心円上から造出し部への屈曲部にあたると考えられる。

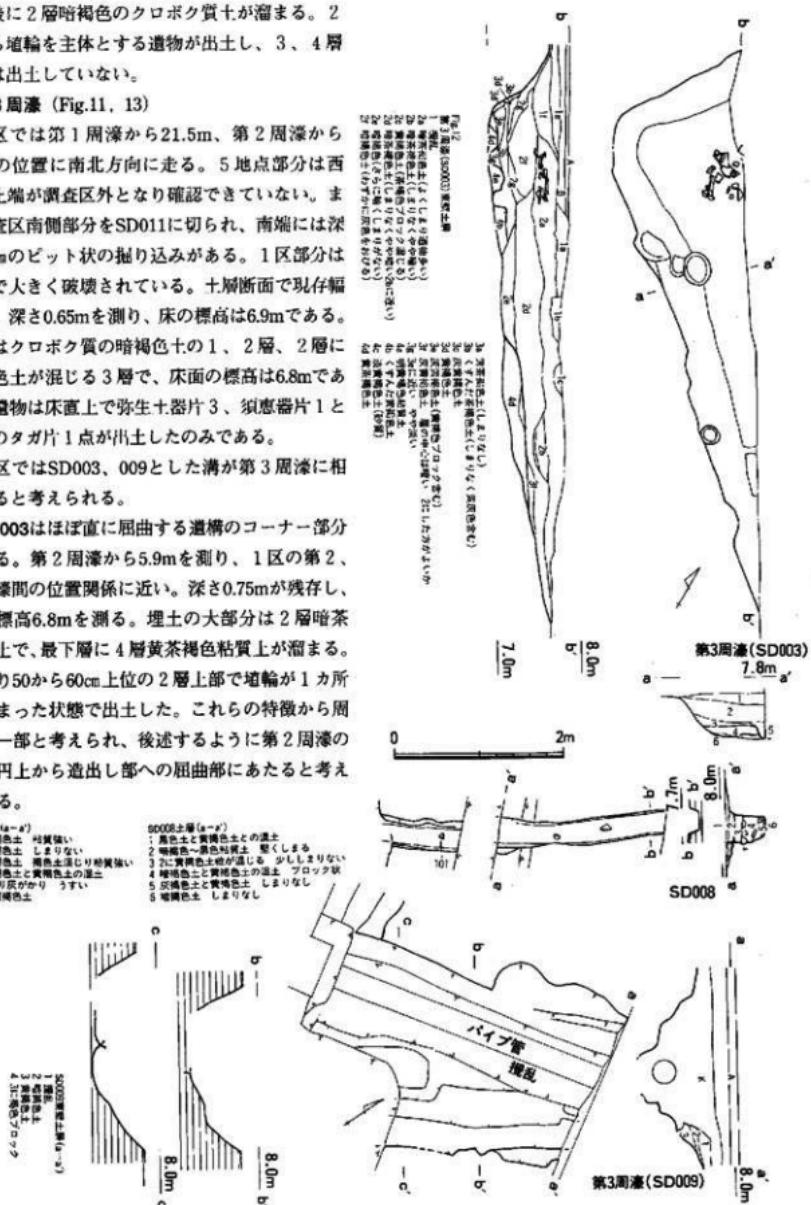


Fig.13 2区第3周漆、SD008 (1/60)

SD009は2区の南端で第2周濠と同様に調査区を斜行する溝である。現代の土管埋設溝等により大きく攪乱を受け、南側の上端から底の一部のみを確認した。Fig.13のa-a'、b-b'断面から復元できる幅は最大でも1.9mである。深さは0.6mで床の標高7.2mを測る。埋土はクロボク質の暗褐色土で少量の埴輪と須恵器片が出た。後述するように造出し部の外濠にあたると考えられる。

SD008 (Fig.13)

009とほぼ並行して走る幅40cm、深さ50cmの溝で床面の標高7.5mを測る。壁がほぼ直に立ち、一部えぐれた部分がある。埋土は暗褐色粘質土と鳥栖ロームがブロック状に混ざる。遺物は少ないが、床直上から若干の埴輪が出たしており、古墳に関連があるものと考えられる。

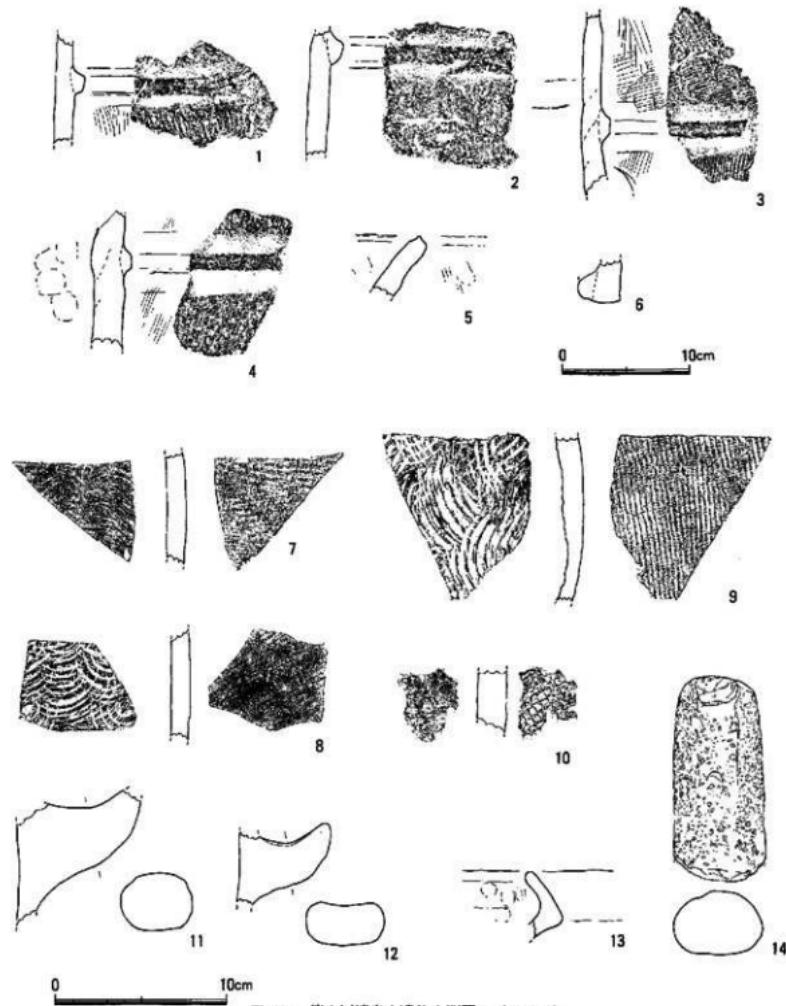


Fig.14 第1周濠出土遺物実測図1 (1/3, 4)

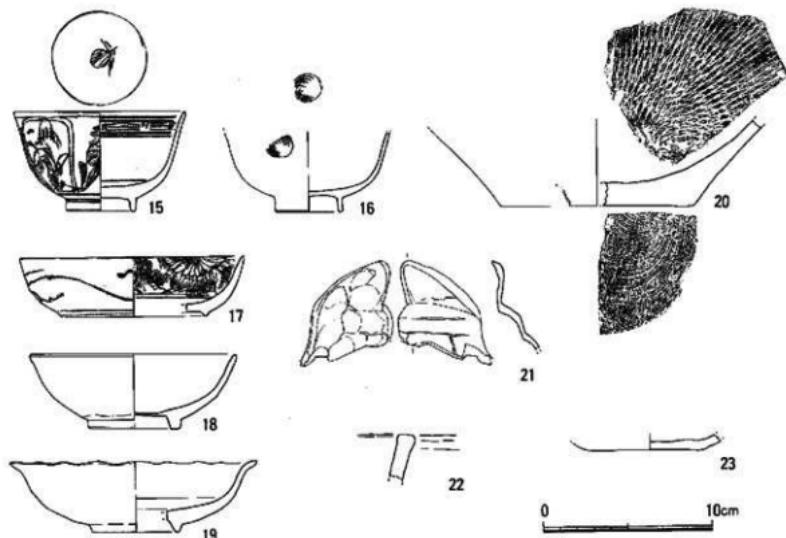


Fig.15 第1周塚出土遺物実測図 2 (1/3)

(2) 出土遺物

古墳に関連がある遺物のほとんどが埴輪で、そのほとんどが円筒埴輪が占め、若干の形象埴輪が出士している。小破片が多く、完形に復元できるものはない。15次調査では朝顔形埴輪が出士しているが今回も確認できなかった。朝顔形埴輪は破片では円筒埴輪との区別が困難で、出士している可能性もある。ここで今回出士した円筒埴輪の概要を記しておく。

口縁部は外反するものがほとんどで43のように直立するものもある。口唇端は強い横なで調整で面取りするものと顕著ではないものがある。器面調整は口縁部は斜め方向、体部は縦方向のハケメ調整を施すが一次調整のみで二次調整は行わない。内面は縦方向から斜め方向のなでを施し、口縁部は30の様に横になれるものや57の様に横方向のハケメ調整を施すものがある。ハケメの原体には3本/cmから8本/cmのものがある。タガは台形もしくは頭いM字型で、上端が張るものが多い。今回は15次調査で出士した断続なしで調整を施すものはない。胎土は砂粒の多少はあるが4mm大までの砂粒を含む。赤茶色の鉱物を含むもののが少量ある。色調は焼成にもよるがおおむね黄茶色を呈し、焼きがあまいものに黄白色を呈するものがある。赤色顔料を施すものが数点出上しているが、いずれも残りが悪く実際ににはさらに多かったと考えられる。黒斑を持つものではなく、須恵質に近い発色をするものもあり、穴窓による焼成を行ったものと考えられる。底部はよく焼きがあまい。孔は円形のみで鋭利な工具で器面調整の後に施す。

第1周塚 (Fig.14, 15)

出土した遺物の多くは近世のもので近代に入るものもあるが、若干の埴輪、須恵器等が出土している。1から6は埴輪である。1から4は外間に粗いハケメを施し内面はなで調整で、胎土に砂粒を多く含み、焼きがあまいものが多い。3の調整はタガの下は1次調整の継ハケだが、上にはタガを貼付

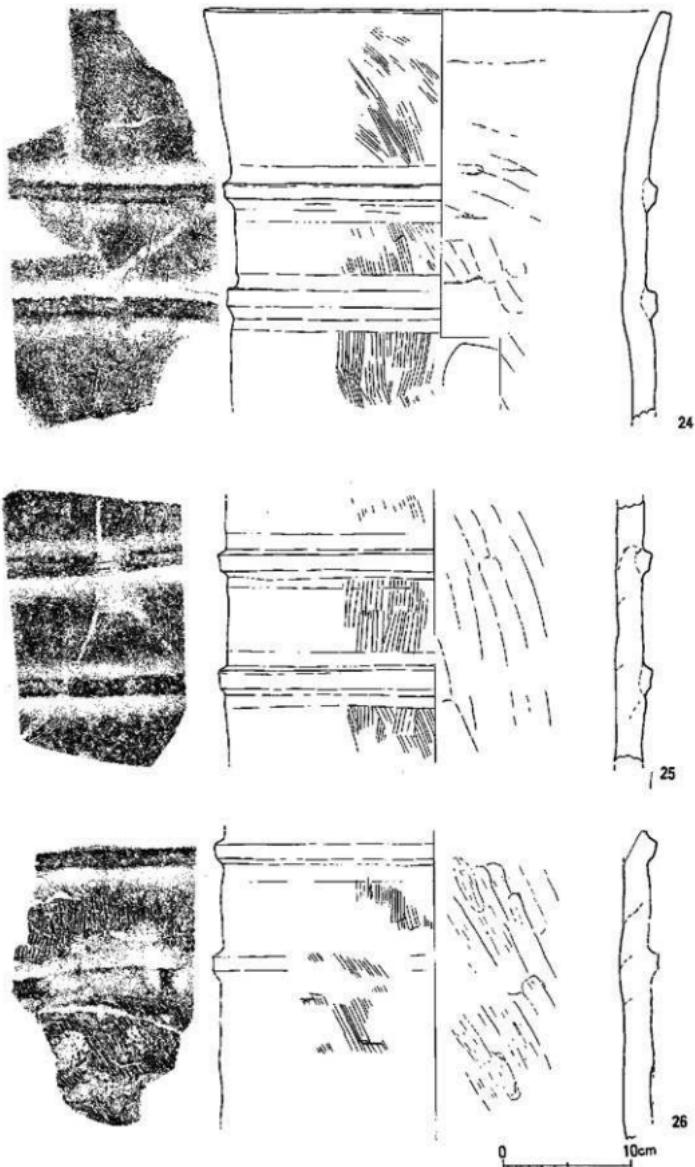


Fig.16 1区第2周出土遺物実測図1 (1/4)

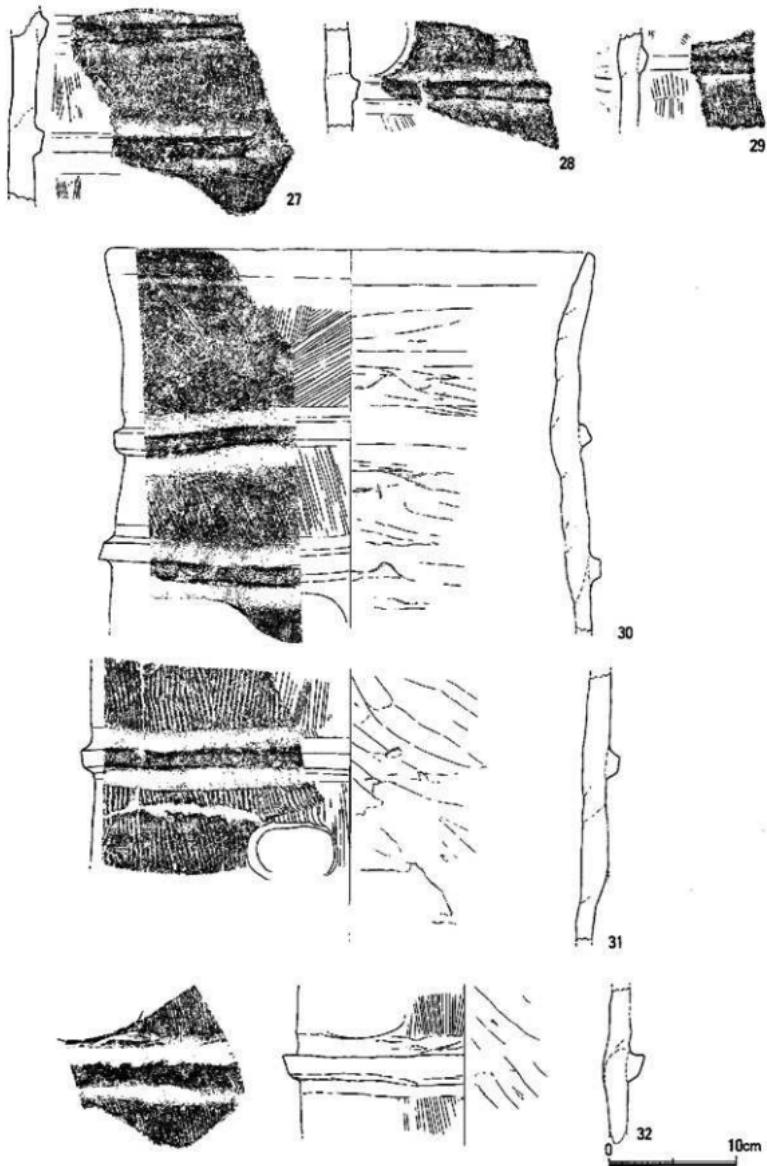


Fig.17 1区第2周漆出土遗物实测图 2 (1/3)

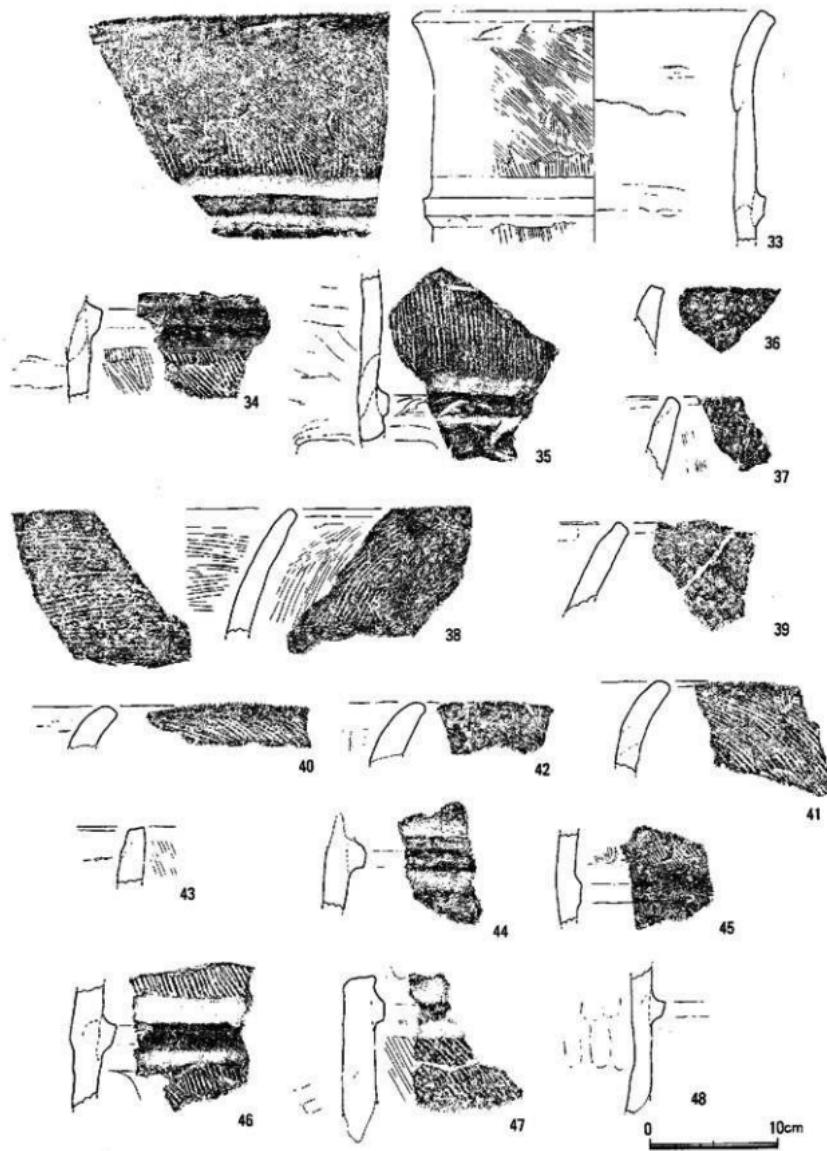


Fig.18 1区第2层出土遗物类测区3 (1/3)

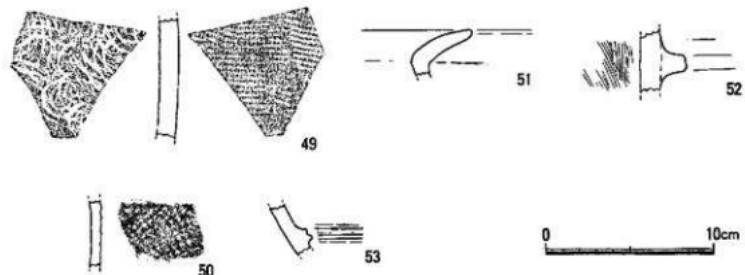


Fig.19 1区第2周濠出土遺物実測図4 (1/4)

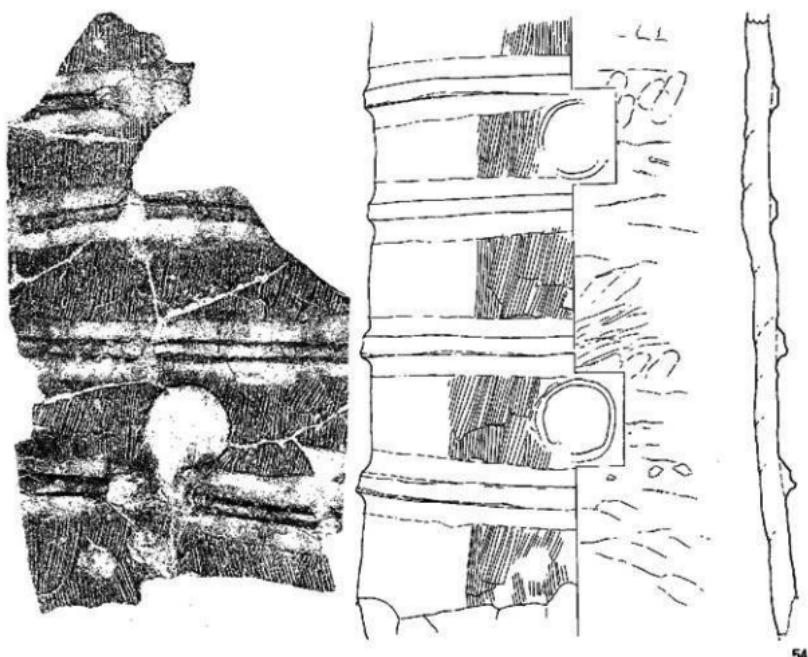
した後に横ハケを2次調整として施している。さらに上部には、その上から粗い縦ハケを施す。今回出土した中でも例外的なものである。5は口縁部、6は底部で、6は特に焼成があまい。7から10は須恵器の甕の肩部で外面に7、8は平行、9は疑似格子目、10は格子目叩き痕、内面に当て具痕が残す。11、12は土師器の瓶の取手、13は弥生後期の壺の口縁部である。14は気泡が多い火成岩製の石斧で全面に敲打痕が見られる。15から23は近世を主体とした遺物である。15から17は伊万里系の染め付け碗および皿、18は青磁碗、19は白磁で内面を輪状に剥離する。20は陶器のすり鉢。21は土製の人形型できめの細かい精良な胎土である。22は瓦質の鉢、23は糸切り底の土師皿である。

第2周濠 (Fig.16~23)

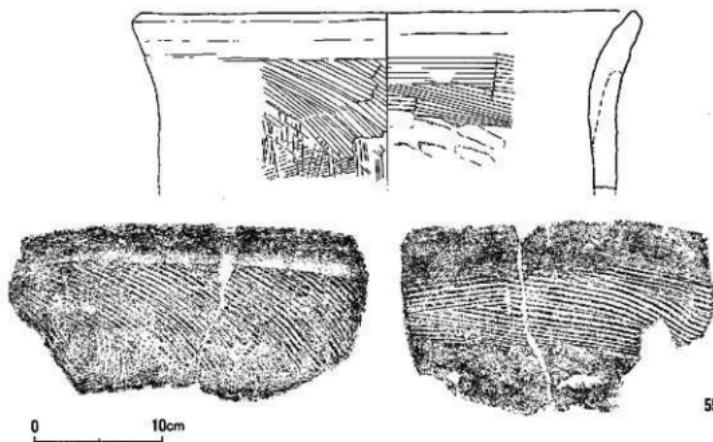
狭い調査区全体に円筒埴輪を主体とした遺物が出土した。

1区では中央と両端にやや集中する部分がある。このうち中央部の破片は接合する同一個体が多く、また北側の破片と接合する。24と25がこれで、26、27までは同一個体と考えられる。外面縦方向のハケメ調整で内面は下から上になれる。赤茶色の鉱物を含む点も共通する。30は口唇部の面取りを行わず内面には横方向のなでを施す。31は1/2弱が残存する。2~3本/cmの目の粗いハケメ調整を施す。32のタガは上端の張り出しが著しく異質である。33にはタガと外面の一部に赤色顔料の痕跡が残る。40と41は同一個体の可能性が高い。44は焼きがあまく黄白色を呈す。47は器壁が厚く底部近くとを考えられる。49は須恵器の甕で外面は疑似格子目叩き、内面は当て具痕が残る。50は土師質で外面に疑似格子目たたきを施す。51は古代の土師器の甕である。52、53は弥生土器で52は大型の甕の尖端、53は外面に赤色顔料を施す中期の壺である。

2区ではFig.12の様に3カ所で遺物が集中して出土した。特に東側の部分に多く、調査区外に広がる。54は中央部分と両端の部分のものが接合し、5段分1/3強が残存する。外面に縦ハケ、内面は横ナデ調整を施す。55は外面を若干右上がりの横ハケの後に、縦ハケ、左上がりの斜め方向のハケメ調整を行い、ハケメ原体がそれぞれ異なる。内面はケズリ風の深い調整の後に横方向の断続的なハケメ調整を施し、口縁部内外を強く横なです。56は東端部分からまとまって出土した。2段目までが一周する。底面にはハケ状の痕跡と幅2cmの棒状の圧痕があり、後者は焼成前に製品が置かれた場所にひかれていたものと考えられる。1段目のタガ直下には、横なで調整後に横方向の沈線が刻まれてい

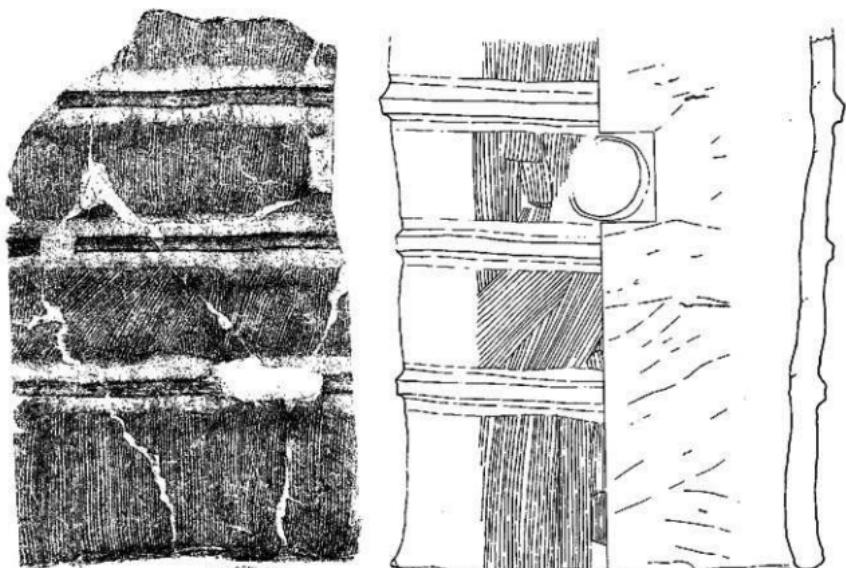


54

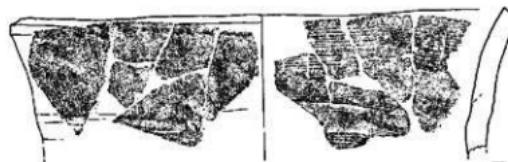


55

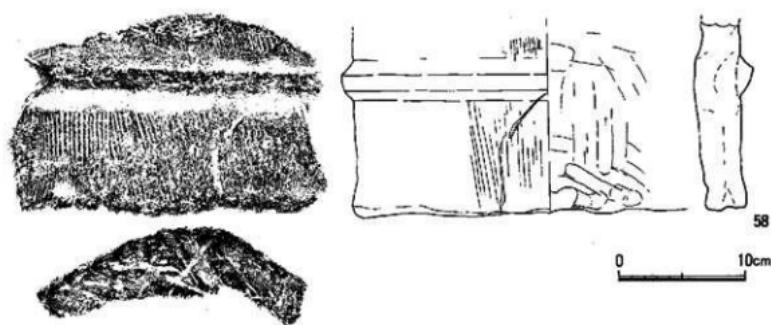
Fig.20 2区第2周出土遺物実測図1 (1/4)



56



57



58

0 10cm

Fig.21 2区第2周漆出土遗物实测图 2 (1/4)

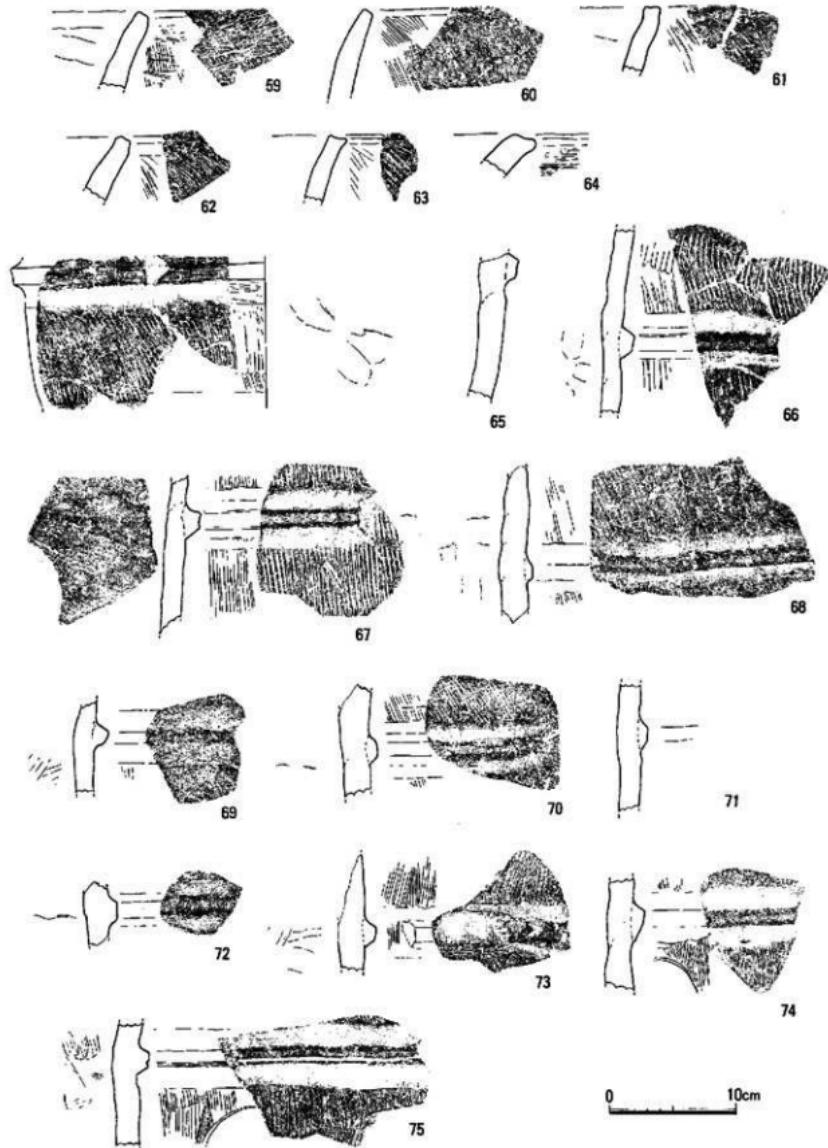


Fig.22 2区第2周出土遺物実測図3 (1/3)

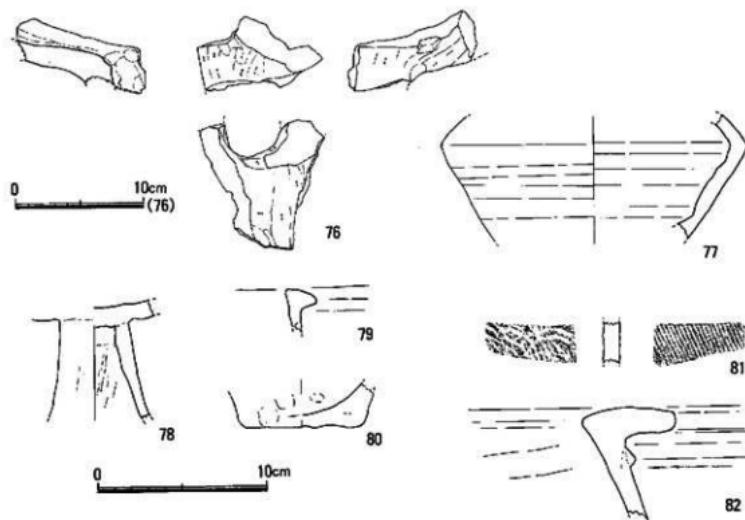


Fig.23 2区第2周塚、1区第3周塚出土遺物実測図4 (1/3, 4)

る。57は外面は縦ハケで口縁部を横なで、内面は断続する横ハケを施す。58は焼成があまく、黄白色を呈す。底面には1.5cm幅までの凹線、沈線状の圧痕があるが、編んだ様な状態ではない。59、70、74、75には赤色顔料が若干残る。67はタガが一部剥げ、1次調整綫ハケの連続が観察できる。75は8本/cmの細かな縦ハケを施す。76は形象埴輪で馬等の足の付け根部分と考えられる。内面になで痕跡が稜を成している。77は須恵器の長頸壺の肩部、78は高坏の脚で外面に赤色顔料が見られる。79は弥生前中期の甌、80は弥生前期から中期の甌の底部である。

第3周塚 (Fig.23, 24, 25)

1区では遺物の量が極端に少ない。弥生土器片3点、須恵器片1点、埴輪のタガ1点が出土した。81は須恵器の甌で外面は平行叩き、内面には當て具痕が残る。82は弥生中期の立岩式甌棺の口縁部である。

2区のSD003ではFig.13のように1カ所に集中して埴輪等が出土したが、接合するものは少ない。83、84は焼きが良く、内面は還元して灰色を呈す。85、88の外面上には赤色顔料が残り、85は特に明瞭である。89から92は焼きがあまく淡黄色を呈し、同一個体と考えられる。94は形象埴輪で屈曲部と何らかが剥げた部分が表裏に見られる。家形の側壁かと考えられる。95は副部の突帯で弥生中期の甌棺のものと考えられる。96は須恵式甌棺の口縁部である。

SD009から出土した遺物はごくわずかである。97、98は埴輪片で97は焼きが良く、一部還元して灰色を呈す。99は須恵器である。

SD008 (Fig.26)

100、101は円筒埴輪、102、103は形象埴輪である。102は外面は丸みを持つが、内面は平坦で腹面部分で屈曲する。家形埴輪の側壁等を考えている。103は湾出した筒状を呈し、腕等の部分と考えられる。

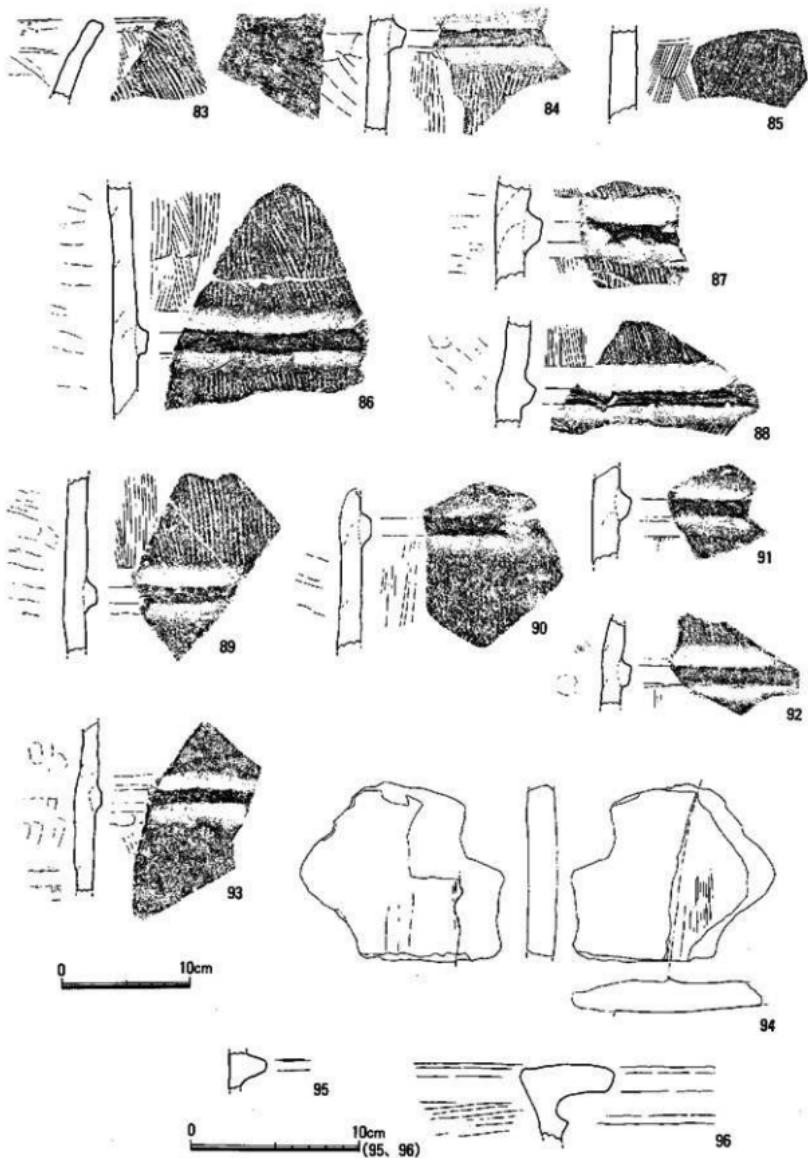


Fig.24 2区第3周溝(SD003)出土遺物実測図(1/3, 4)

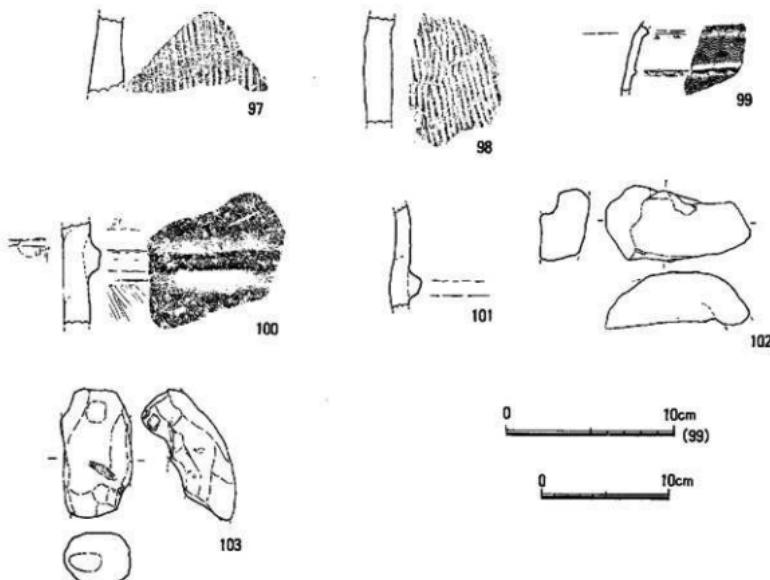


Fig.25 2区第3周溝 (SD009)、SD008出土遺物実測図 (1/3、4)

2) その他の遺構と遺物

(1) 溝 (Fig.26)

SD007 2区の南端付近を N-40°-W の方向に走る溝で SD008、009 を切る。延長 7m を検出した。幅は西側上端が調査区外に出るため不明である。深さ 70m を測り断面逆台形を呈すと考えられる。埋土は淡黄褐色土のしまりがない土で均一である。埴輪等が出土したが、埋土から中世以降のものと考えられる。

出土遺物 104は円筒埴輪の底部で、焼きが悪く黄白色を呈す。底には幅 2 cm の断面削竹形圧痕がある。105、106は形象埴輪である。105は外面に細く浅い沈線を施す。家形の屋根部分と考えられる。106は焼きが悪く黄白色を呈す。扁平円柱状を呈す。部位不明。107は須恵器の甕の胴部、108は弥生中期の甕である。

SD011 5地点で検出した溝で N-70°-E の方向で第3周溝を切る。幅 1.3m、深さ 0.6m を測り、断面逆台形を呈す。床面には 3 から 5 cm 大の小ピットが点在し、標高 6.75m である。埋土は黄褐色土である。位置関係、埋土等から SD012 と同一の溝と考えられる。また、第 1 地点の溝と方向、埋土が近く、関連が考えられる。ただし第 4、5 地点どちらの溝とも、2 区ではその延長を検出していない。

出土遺物 109は瓦質の瓦で外面に繩目叩き、内面に布压痕が見られる。110、111は須恵器の甕胴部で 110 は外面擬似格子目叩き、内面當て具痕が残り、111 は外面に併行叩き、内面はなで調整である。

SD012 1区の東端部に検出した溝で南側の上端は調査区外である。方向は N-70°-E で深さ 0.7m を測る。埋土は淡灰色土で均一である。

出土遺物 114は須恵器の甕で外面は併行叩き、内面は當て具痕が残る。113は須恵器の高环の脚部

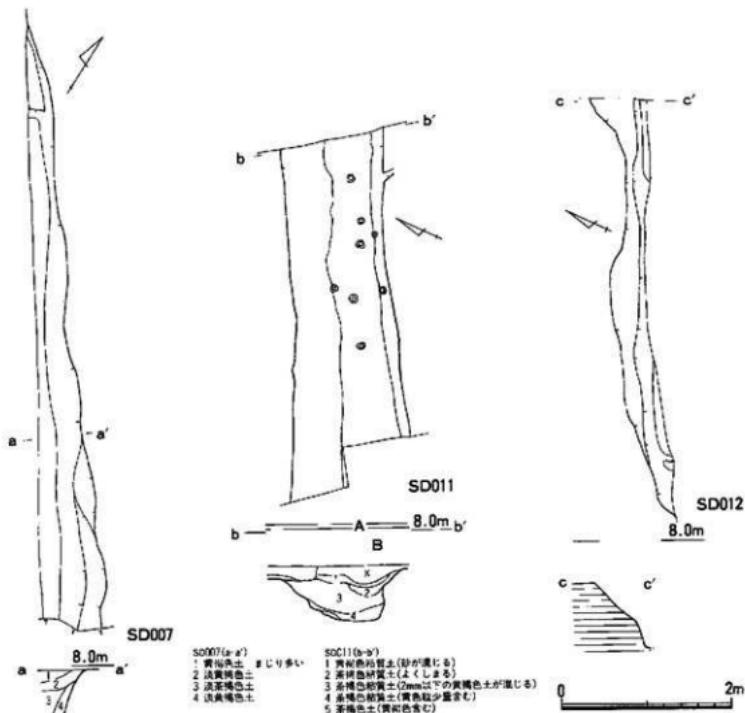


Fig.26 SD007、011、012実測図 (1/60)

で透かしが3方にに入る。112は青磁の碗である。

(2) 近世墓 (Fig.28, 29)

2区南側で3基の近世墓を検出した。西側の雑木林に続くと考えられる。20mほど南の16次地点では近世墓22を確認し、1960年代に雑木林で低い土盛りをもつ近世墓が無数にあったという聞き取りを得ている。明治33年の地図 (Fig. 2) では剣塚から南に張り出た今回の調査地点西側の高まりと、16次調査の高まりとの間には鞍部がある。細かなことは判断しがたいが、聞き取りでの雑木林と今回の地点は一連のものであろう。先の地図では剣塚古墳の北東、北西に隣接した位置に墓地の記号があり、周辺に近世墓が多く存在したことをうかがわせる。

今回検出した3基のうちSK004と005の2基は調査区外に広がる。覆土はいずれも暗茶褐色のクロボク質の粘土上に黄褐色のロームブロックが混ざる。また、骨が残存しているが、薄く、溶けた様な状態で残りは悪い。SD004、006からは断面方形の鉄釘が出土し、木棺である可能性がある。SD006で寛永通宝が出上していることから近世墓とした。

SK004 半分以上が調査区外に出る。墓壙のプランは隅丸長方形で、長軸77cm以上、幅60cm強、深さ19cmが遺存し、壁は立つ。長軸方向はN-3°-Eである。墓壙中央部には床面から3cmほど浮いた位置に2片の骨が残存し、周囲からはガラス玉が28個出土した。

出土遺物 115から142はガラス玉でほとんどの個体が径6mm、厚さ4または5mmで、重さは0.18か

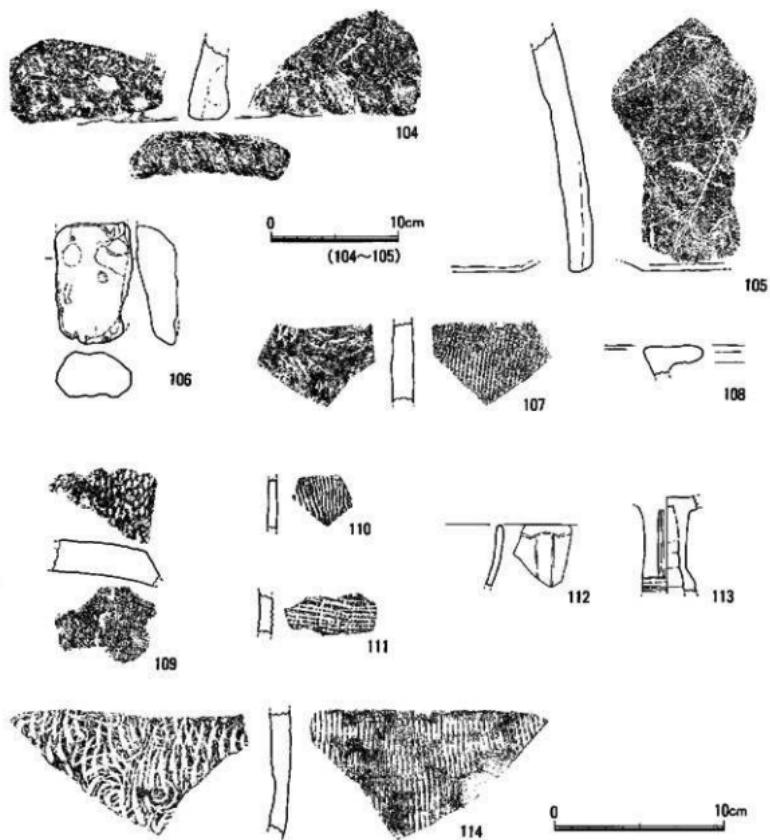


Fig.27 SD007, 011, 012出土遺物実測図 (1/4, 3)

ら0.33gを測る。外皮を被り淡褐色、乳白色を呈すが、その内側は透明感はあるもののくすんでいる。129は透明度が高い。

SK005 ほぼ1/2が調査区の外である。墓壙の平面プランは隅丸長方形で長軸100cm、短軸60cm強、深さ20cmを測り壁が立つ。長軸方向はN-4°-WでSK004とほぼ同じである。墓壙の北端中央には、頭蓋骨が頭頂部を上にして出土した。骨は風化が著しく、薄く断続的であるが、骨は残る。中央部にも骨の痕跡が見られる。鉄釘が北東端に3個、東側中央に1個が床から浮いた状態で出土した。

出土遺物 鉄釘 143から146が出土した。いずれも長さ3cmほどで、断面方形を呈す。頭は143、145は平坦部を造り、145は曲げている。143から145には木質が残り、145には2方向の木目が直行する。

SK006 平面プランは椭円形に近く、西側は他の墓壙と切り合いがあるようで不明瞭である。長軸約115cm、幅72cm、深さ16cmを測る。長軸方向はN-114°-WでSK004、5と異なる。壁はSK004等と

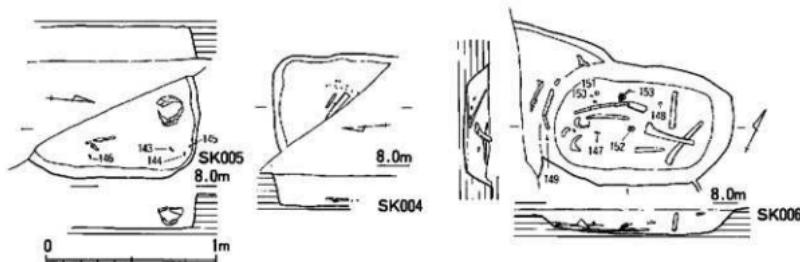


Fig.28 SK004, 005, 006実測図 (1/30)

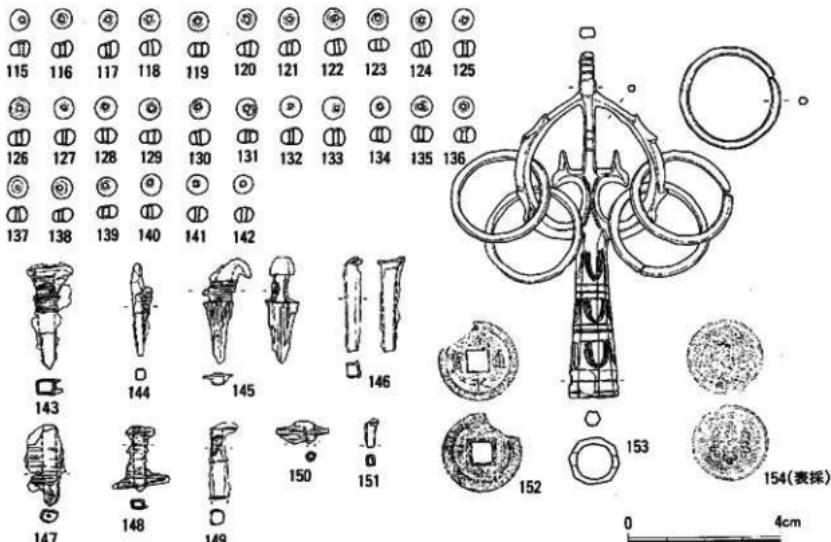


Fig.29 SK004, 005, 006出土遺物実測図 (2/3)

比べると緩やかな傾斜である。床から5から17cmほど浮いて骨が出土したが、残りは良くない。東側が足と考えられる。骨は西側の墓壙プラン推定位置および外にも残存し、他のやや浅い墓壙から切られていると考えている。中央には「寛永通宝」が、北側では青銅製の錫杖の頭が南面を上にして出土した。西半から5本の鉄釘が出土している。頭位は西側と考えられる。

出土遺物 147から151は鉄釘で、断面長方形を呈し、1辺4mmから7mmと不揃いである。147から150には日付が残る。152は銅錢で「寛永通宝」の文字がはっきり見える。153は青銅製の錫杖の頭で全長10.3cm、重さ45gを測る。筒部は8角形で内径1.1cmを測り、基部の対面する位置に2孔を穿つ。径2.5mmの輪を左右にそれぞれ2、3個繋ぐ。1個の輪が折れて外れたため図では別に示した。

(3) 近現代の遺構

以上で触れてきた古墳時代から中世の遺構の他に主に工場に伴うと考えられる遺構を確認した。これらについては、古墳周濠に関連する部分以外は掘削を行っていない。また、表面で観察できるものは、プランを記録に取ったが、今回は図の煩雑を避けるため、やはり古墳周濠に関わるもの以外は省いている。若干の概要を記しておく。1区では調査区に平行して北側の端に煉瓦積みの溝に陶器管が走る。その延長に煉瓦製の80cm四方の升があり、ここから管が分岐する。また、そのすぐ南には鉄管が併行して走る。この陶器管は1区西端4mで南へ屈曲し2区中央を走るが煉瓦溝がない部分もある。鉄管も2区でその西側を併行する。Fig.10の平面、土層にその一端が現れている。1区では中央の一部と、南側にやはり調査区に沿って溝が走り、密に方形、円形の掘り込みが見られる。また、廃材を捨てた穴も2カ所に見られ、そのうち1つが第3周濠を破壊していた。154は銅錢で大正7年の銘がある。工場初期に埋まったものだろうか。表採品である。

(4) 旧石器時代の遺物 (Fig.30)

東光寺剣塚古墳周濠内より1点の旧石器石器が出土した。当然原位置を遊離したものであり、本米の出土地点、層位は不明である。しかし、石器表面の二次的磨滅やバティナ、傷などはほとんどなく、周濠内へ転落以降大きく移動したとは考え難い。

155は石核である。風化の強い漆黒色黒曜石であり、剥離面はざらつく。背面には自然面があり、アバタ状の亜円礫を母岩とする。素材は亜円礫より剥出した縦長厚手の帽子状剥片である。背面には数枚の剥離があるが、自然面除去などの石核調整剥片と先行剥片剥離に伴うものである。主要剥離側に大きく4面の剥離があり、これが目的剥片剥離と考えられる。剥離は打面となる素材背面に二次調整を加えず、調整剥離面や自然面との稜を打点としている。剥離された目的剥片は背面にボジ面を

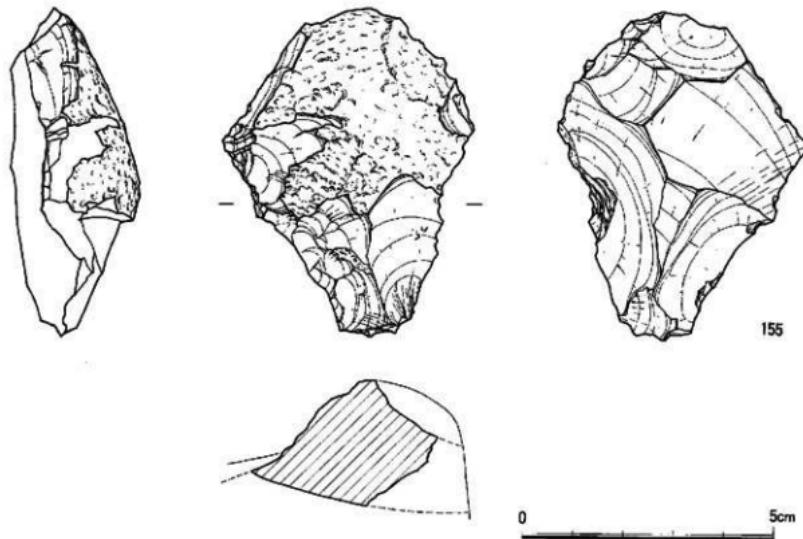


Fig.30 旧石器資料遺物尖洲岡 (1/1)

有する不定形の横長剥片と予測される。現存長6.5cm、幅5cm、厚さ2.5cmを測る。

なお、この石核に見られる剥離手法は原ノ辻型台形(様)石器の素材剥片剥離に類似し、市内での類例は井田B遺跡第6次調査にある。

また、今回の調査区に隣接する那珂遺跡群第15次調査において、約50m離れた同じ古墳周濠内（第1トレンチ）から1点の台形石器が出土している。今回報告した石核と石材や表面面がきわめて類似している。同一母岩であり、同じ石器群に含まれる可能性を指摘しておきたい。本資料は後期旧石器時代後半期に位置付けられるものである。

4. その他の地点の調査 (Fig.31~33)

概要でも記したように削平が大きく、4地点で溝を検出した他に顕著な構造は確認していない。正確なレベルを測量していないが、地表とした標高はほぼ水平で8.2mほどである。

(1) 第1地点 事業地の南西側で14次調査地点に近い。2枚のアスファルトの整地の下に粘質の強い茶褐色土、黒色土が堆積し4m以上を掘削したがロームの底に達しなかった。ただし、現況下4m

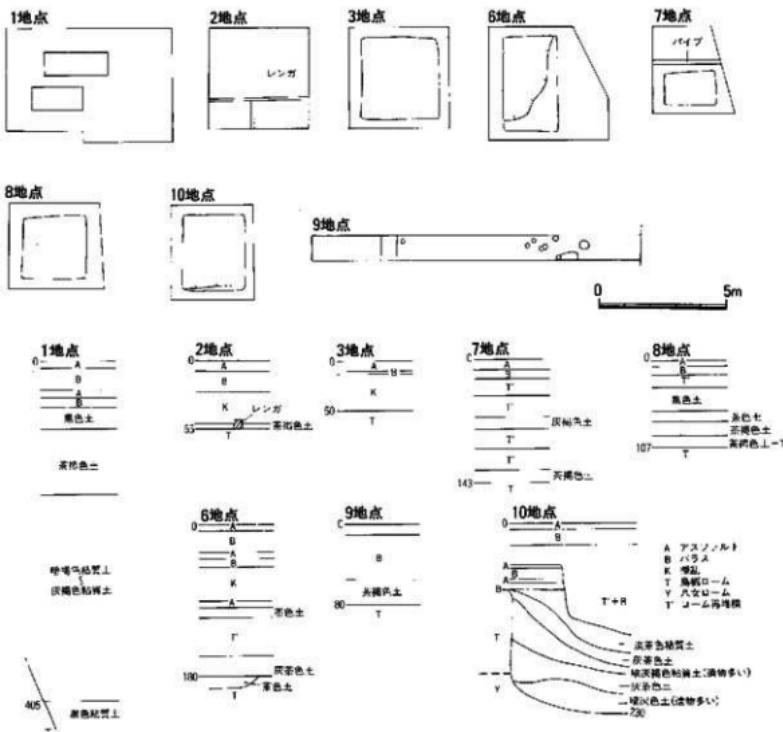


Fig.31 第1から第10地点略図 (1/200, 1/60)

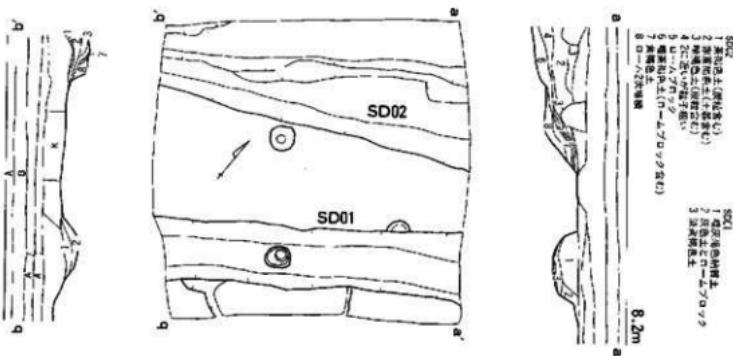


Fig.32 第4地点実測図 (1/60)

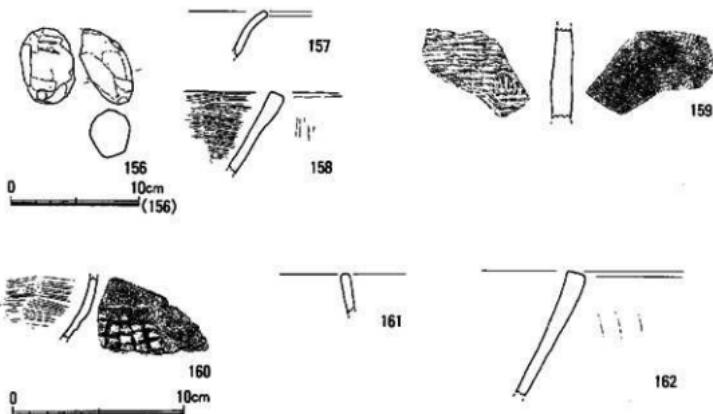


Fig.33 第1、6地点出土遺物実測図 (1/4, 3)

付近で急なロームの斜面を確認している。遺物は検出できなかったが、木片等の有機物を少量ながら検出した。周辺は現況下60cmほどでローム層に至っており、何らかの落ち込みがあるのは確実だが、人工的なものか自然地形かは不明である。立地の項でも触れたように、東光寺剣塚古墳の南西の試掘調査でも湿地状の堆積が確認されており、狭い谷等が入る可能性もある。

(2) 第2地点 2地点から5地点は事業地中央に位置する。現地表下65cmでローム層に達した。幅17cmの煉瓦製の基礎の外は遺構を検出できなかった。

(3) 第3地点 現地表下50cmでローム層に達した。近現代のピットを数基の他に遺構はない。

(4) 第4地点 (Fig.32, 33) 現地表下60cmでロームに達し、2条の溝とピット2つを確認した。

SD01 N-54°-E の方向に走り幅0.7m、深さ30cmを測り、底の標高は7.6mである。黄褐色土を覆土とする。遺物は土師質の小土器片が少量出土したのみである。

SD02 N-65°-Eの方向に走る。北側が調査区外のため規模は不明である。深さ55cmを測り、床の標高は7.05mである。底より10cm高い位置で段がつき、このプランと下端はSD01にほぼ並行する。上端が本来の溝のプランを表していない可能性もある。底付近より以下の遺物が出土した。

出土遺物 156から159が出土した。156は上師質の上製品で形象埴輪の一部の可能性が高い。157は青磁で淡い灰緑色を呈す。158は瓦質の鉢で内面にハケメ調整を施す。159は須恵器の甕で外面に平行叩き、内面に当て具痕が残る。

- (5) 第5地点 第3周溝と中世の溝を検出した。11地点と統いており、一緒に調査報告した。
- (6) 第6地点 6から10地点は事業地の東側に位置する。立地の項で触れたように、東側の道沿いに浅い谷が入るため、西よりも地山が落ちる。地表下1.8mでローム層に達した。地表下1.5mまでが盛り上である。深さ30cmほどの茶色ブロックを主な理土とする窪みがあり、若干の遺物が出土した。160は瓦質の土器で外面に格子目叩き、内面にハケメ調整を施す。防長系とされる足鍋と思われる。161は上師質の土器の口縁部で「寧な横ナデ」を施す。162は瓦質の鉢である。
- (7) 第7地点 地表下143mでロームに達した。遺構遺物は検出していない。地表下130cmまでは近代の客土である。コンクリートパイプは11地点のSD009を切るものと一連のものである。
- (8) 第8地点 地表下107cmでローム層となる。62cmまでは近代の客土である。
- (9) 第9地点 第8地点から西に13mほど試掘調査を行った。西側端部は地表下80cmでローム層に達し、8地点までの落ちは緩やかである。暗褐色砂質土を覆土とするピットを検出した。中近世のものと考えられる。
- (10) 第10地点 地表下0.85mで鳥栖ローム層に達し、そこから深さ1.4mの段落ちがあり、近現代の陶磁器等が出土した。地表下1.8mからは八女粘土層である。

5. 小結

今回の調査は、東光寺剣塚古墳の周濠の確認と遺構分布の把握に主眼をおいたものとなった。

1988年の東光寺剣塚古墳の調査では墳丘、周濠、石室について調査が行われ、すでにその規模、形そして遺物、時期等の検討がなされている。今回は、周濠、遺物について、ほぼ第15次調査の追認する結果を得た。今回の調査は規模の小さなものではあるが、前回が限られたトレンチ調査での確認であったため、意義は大きい。

11地点1区は、墳丘主軸の後円部側延長にあたり、第1、2、3周濠の東端を確認した。2区でも第1、2、3周濠を検出し、「造り出し部」の規模が大きくなること確認した。「造り出し部」は第15次調査の3トレンチでその一部が明らかになり、追加したトレンチをもとに、第3周濠から約10m、幅約15mほどの「コ」の字型の「造り出し」が推定されていた。今回検出したSD003は、第3周溝の延長にあたる位置で屈曲し、SD009が周溝と平行する。第15次の4、5、6、7、トレンチ(Fig.34)で確認された落ちは明確に溝のものと言える形状ではなく、今回のSD003を第15次の3、8トレンチで確認した屈曲部に対応させるのが妥当と考えられる。これから推定できる「造り出し部」は第3周溝の外縁から約14.5m、幅約40mの規模(Fig.35)になる。また、SD008や先の4等のトレンチで確認された落ちなど、「造り出し部」内に何らかの施設があった可能性も考えられる。

遺物は、円筒埴輪を中心に出土し、6点の形象埴輪と考えられる破片が出土した。これらのうち5点が「造り出し部」の周濠・中世の溝からの出土で、他の1点も2区第2周濠の出土である。第15次調査と同様この部分に集中することを追認した。

最後に調査区内の地形は、11地点以外では東側に向かって標高が落ちる。また、第1地点で谷また



Fig.34 東光寺剣塚古墳全体図 (1/600)

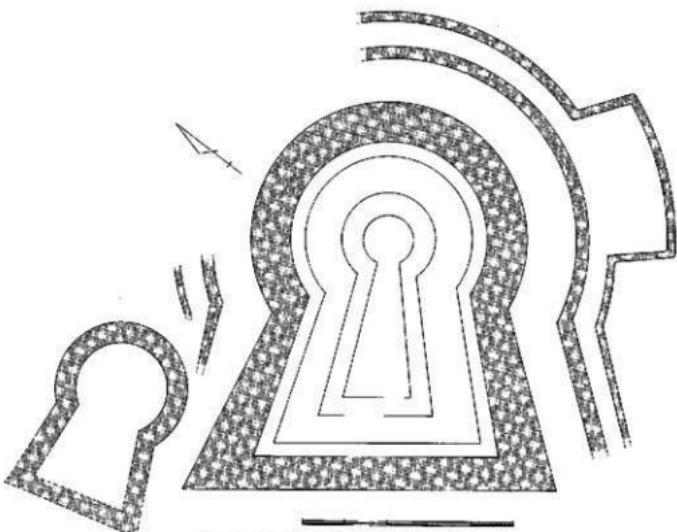


Fig.35 東光寺鍵塚古墳復元推定図 (1/1200)

は溝状の急な落ちと湿地状の堆積を確認した。その他は鳥栖ロームが大きく削平を受けた状況を確認した。遺構の残りは悪く、東側を除いては、溝や井戸等の深い遺構が残る程度と考えられる。

V. 立会調査

工場敷地の南東隅に隣接するアパート解体に伴う立会調査を78次調査と平行して行った。現地は工場施設より1mほど高く、南側の道路とほぼ同レベルである。南側には道路を挟んで8次、24次調査地点が近接しており、遺構の広がりが予想できる位置である。(Fig. 3、37)

立会時には上屋は解体が終了しており、61m×9.5mの範囲の重機による基礎と擁壁の撤去作業について立会調査を行った。基礎は2.5mから4mの間隔で密に入り、両側90cmが、建設時の掘削で破壊されている。立会に当たってまず南西隅にトレンチを入れたところ、地表下45cmでローム層に達し、住居跡と考えられる遺構を確認した。重機による掘削は建設時の堀方よりも広い幅を掘削し、遺構に影響を与えることが確実であったため、本調査の必要がありその旨、アサヒビール株式会社博多工場に伝えた。工事は中断し、工場と教育委員会埋蔵文化財課事前審査との間で協議がもたれ、重機のバケットを小さな物に替え、建設時の堀山を壊さないように工事を行うことで、工事は再開した。その後に示すように、住居跡と思われる遺構やピットを、断面で確認する事ができたが、工事の掘削が基礎の堀方内で収まり、ローム層が観察できなかったため中央部より東側では遺構遺物を検出していない。建設時の堀方は広い範囲に及ぶ部分もあり、すでに遺構面が失われていた箇所もある。また、西側に向かって地山は落ち、遺構がない可能性もある。十分な観察ができなかった。また、工事終了後、表土を動き取る計画が出たため、遺構面までの深さを確認する目的で3カ所にトレンチを設定した。以下遺構を検出した部分をまとまりごとに区とし、検出した遺構と、トレンチについて記載する。

1区 地表下45cmの鳥栖ローム層上面で方形住居跡と考えられる遺構の屈曲部を $2 \times 0.4\text{m}$ 確認した。覆土は暗褐色土である。

2区 建設時の履方が広く遺構面が残存するのは2.2×1.8mである。暗褐色土を覆土とする2個のピットを検出した。

3区 断山のみによる觀察でプランがはっきりしないが3.1×2.7mの範囲に暗褐色土が広がり、住居跡の存在が予想される。南側の断山で落ちを確認し、床より遺物が出土したため採集した。Fig.36は弥生中期後半の壺の肩部から頸部肩曲部である。器面の荒れが著しい。

4区 摂壁を撤去した断面で住居跡と考えられる掘り込みを延長1.5m、深さ30cmほど確認した。暗褐色土を覆土とする。

第1トレンチ 深さ70から60cmの鳥栖ローム上面で円形住居と考えられる暗褐色土を覆土とする遺構を検出した。

第2トレンチ 深さ50cmの鳥栖ローム上面で暗褐色土を覆土とするピットを検出した。

第3トレンチ 深さ60cmで鳥栖ロームに達したが遺構遺物は検出出来なかった。

確認できた範囲では遺構が密に分布することが予想される。しかし、建設時の掘削でかなりの部分が破壊されているものも確実である。解体時には慎重な撤去作業が行われたが、基礎撤去後の搬出時等にも重機が敷地内を行き来し、遺構が保存されているか疑わしい。また、解体時の屑などで周囲の土は汚染され、立会調査を行っても遺構を確認することは困難であった。今後同様の工事の場合、解体前の本調査が望ましい。

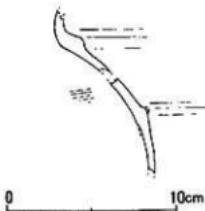


Fig.36 立会調査地点3区出土遺物(1/3)

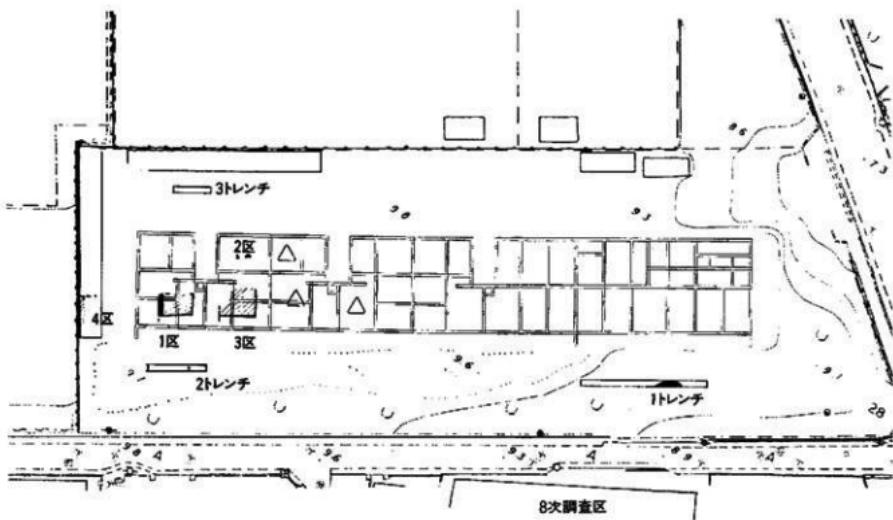


Fig.37 立会地点全体図 (1/500)



(1) 北方上空より



(2) 調査区全景



(3) 調査区と東光寺剣塚古墳



(6) 第1周濠（南から）



(4) 11地点1区全景（西から）



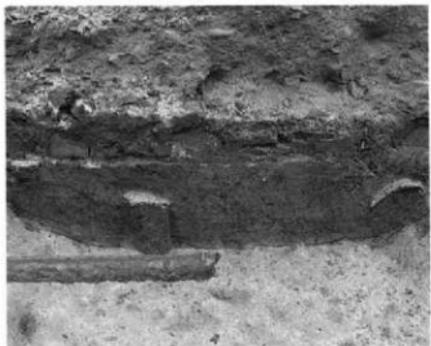
(7) 1区第2周濠（南から）



(5) 11地点2区全景



(8) 1区第2周濠（南西から）



(9) 1区第2周濠北壁土層



(12) 1区第3周濠土層（北から）



(10) 1区第3周濠（北から）



(13) 2区第2周濠（北から）



(11) 1区第3周濠北壁土層



(14) 2区第2周濠（東から）



05 2区第2周濠遺物出土状況（西から）



06 2区第2周濠遺物出土状況（東から）



07 2区第2周濠東壁土層



08 2区第3周濠SD003（北から）



09 2区第2周濠西壁土層



10 2区第3周濠SD003東壁土層



㉙ 2区第3周濠遺物出土状況（西から）



㉚ SD008（東から）



㉛ 2区第3周濠SD009（東から）



㉜ SD008土層（東から）



㉝ 2区第3周濠SD009（西から）



㉞ 近世墓全景（北東）



(2) SK004 (南東から)



(3) SK006錫杖出土状況 (北東から)



(2) SK005 (東から)



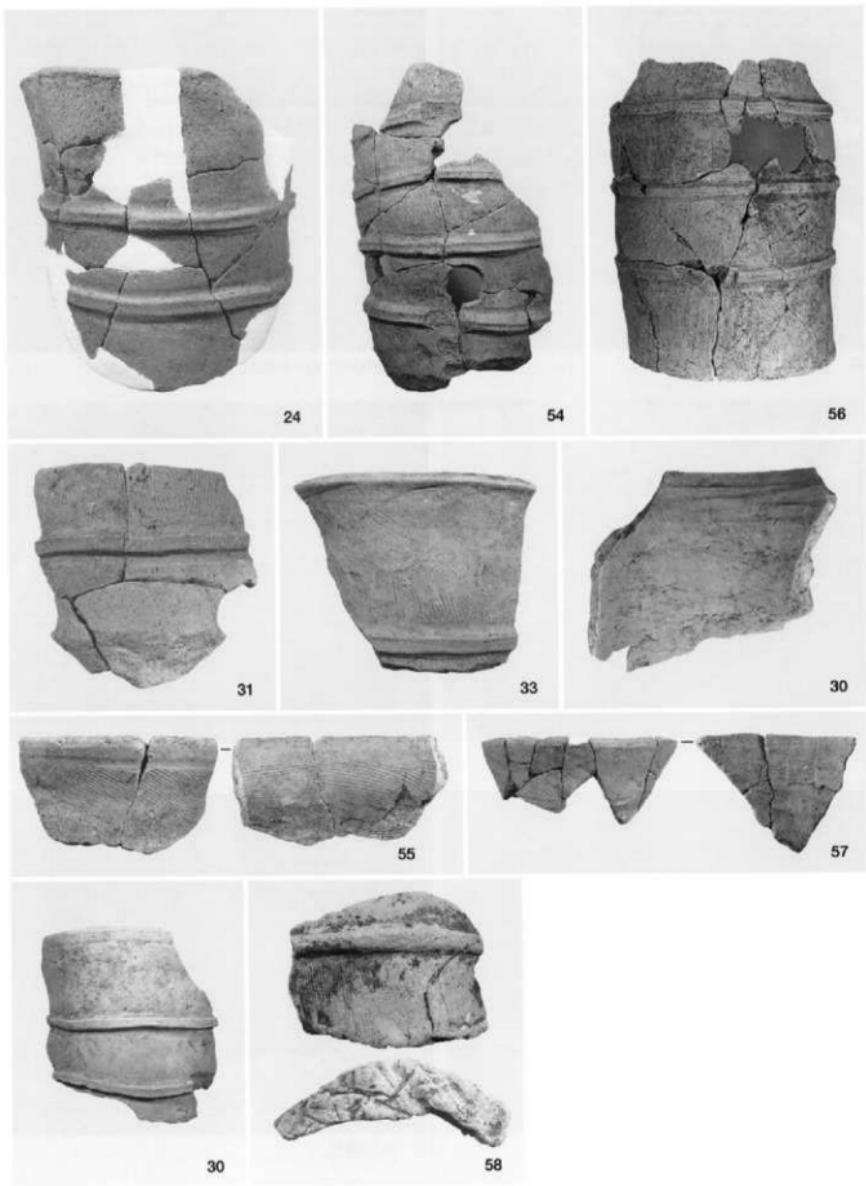
(3) 4地点全景 (西から)

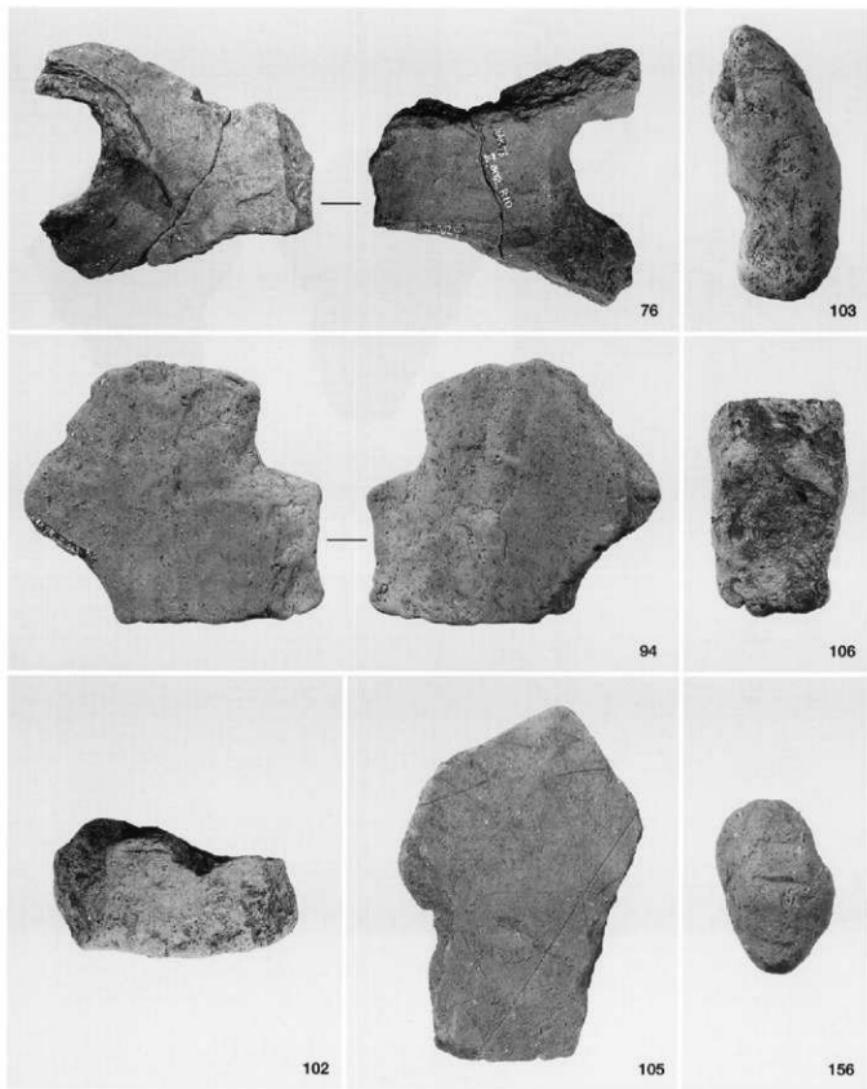


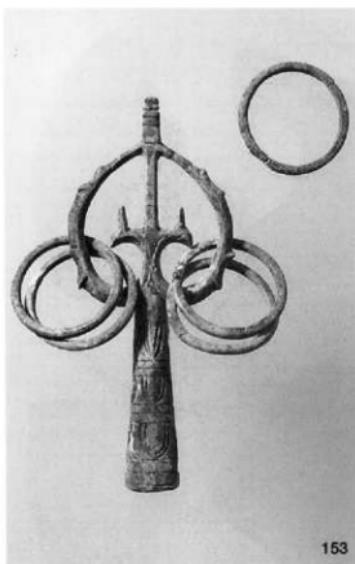
(4) SK006全景 (南から)



(5) 立会調査



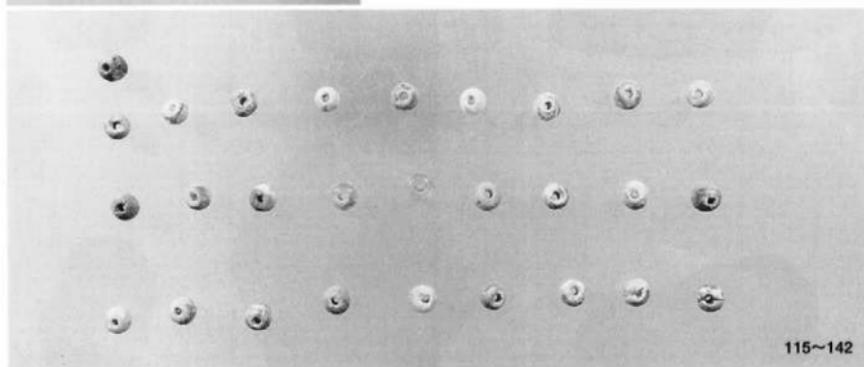




153



155



115~142

那珂 31

福岡市埋蔵文化財調査報告書第715集

2002年（平成14年）3月29日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092)711-4667

印刷 株式会社エイコー社

福岡市西区周船寺3丁目19番9号
(092)806-5566
